

---

# Fate/Aveng

ネコ七夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/Aveng

### 【NNード】

N6555W

### 【作者名】

ネコ七夜

### 【あらすじ】

凛が召喚したサーヴァントはアーチャーではなくアヴェンジャー  
だつたら……?  
キャスターがロリっ子だつたら……?  
魔術師もサーヴァントも破綻した物語。

## F a t e / A v e n u e 電子書籍予告（前書き）

色々後先考えずに連載に移してみた。

今更ながら一発オチのF a t e / s t a y n i g h t 電子書籍予告篇です。

（んなモノを初投降にするなー。）

# Fate/Apocrypha 予告

これはあり得ないFate

登場（召喚）人物も魔術師すら破綻した物語。

体は剣で出来ている。

血潮は鉄で 心は硝子

幾度の戦場を超えて不敗

ただの一度も罪はなく

ただの一度も正義は無し。

彼者は常に悪、剣の丘で処刑を待つ。

故に生涯に善など無く

この世界は

素に銀と鉄

時は満ちた。召喚は聖杯の力を借り行つ。

礎に石と契約の大公

呼び出すのは歴史に名を残す英雄。

祖には我が大師シユバインオーグ

ホテルが渦巻く地下室に熱気が立ち込める。

降り立つ風には壁を

思い描くは一筋の光、どんなモノにも屈せぬ強靭な刃。

四方の門は閉じ、王冠よつてて、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

閉じよ（みたせ）

繰り返すつどに五度

ただ、満たされる刻を破却する

さあ、始めようか。

告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば應えよ

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての惡を敷く者

さあ姿を現せ。私につき従う最強の使い魔。

その手に掴め、最高の勝利を。

汝三大の言靈を纏つ七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

赤い暴風ははじけ飛び、視界が晴れしていくが

「…………え？」

田の前はさつさと変わらぬ地下室の風景。

何も変わらぬ地下室の質量。

「ちよ、ちよっと…[冗談でしょー?]

せっかく秘蔵の宝石まで使って執り行つた召喚の儀式でまさかの失敗か。

やはり綺礼の言つとおり触媒もなしに英靈を召喚するのは無理があつたか。

未だ青ざめたままその場に膝をついた瞬間

ベキバキベギギー————ドゴン————

上方から明らかに我が家が損壊する音を聞いた。

大急ぎで立ち上がり階段を駆ける。

何がどうなつたと言ひのか?

解らない、判らない、分からない。

歪んだ部屋のドアを蹴破り見た先には

「ゲエヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアハハハハハハハハハハハ

1

馬鹿みたいな笑い声？を上げる男がひとり。

「ヒヤハハ！！大ハズレえ、んんん？うんにゃ当たりなのか？1等当選籤で宝くじを買うもんか？中々ぶつ飛んだ発想じやないかよ才ネーサン！！」「

赤い布を額や腰、手足に巻きつけた全身奇妙な刺青を施した黒髪の少年 サーヴァントは一人ハイテンションだ。

なんて無様。

見た限り、目の前のサーヴァントは剣の英靈とは思えない。

となるとまだ召喚されていないのはアサシンかアーチャーといつことになるが……

「ヒューーー。いきなり上空に召喚された時はどこの馬鹿だよぶつ殺してえと思つたけど、見てみりやなかなかイカス小便クセえねーちゃ

んじやん。萎えてきちゃったよ。ヒヤハハ！！

どちらにしてもマトモな思考回路の持ち主ではなさそうだ。反英靈に違いない。

「確認するわよ。あんたが……私が呼び出したサーヴァントで間違いないわ……よね？」

「ヒヒヒ、素敵な疑問形ありがとよ。ああ、間違いなく俺はオネサンに呼び出されたサーヴァントだ。」

ニヤニヤと邪悪な笑顔で、まるでチンピリのよつな態度を取る全身刺青の英靈。

「なら次の質問よ。クラスと真名を教えなさい、今すぐ。」

「うわ、こきなりお堅い態度。円滑な人間関係無視かよ。」

何と言うか目の前の男が英靈であるうとムカつく態度だ。

「ま、いいか。別に隠すつもりもないしな。」

面白がる顔は至極、面倒くさそうに頭の後ろで手を組み一瞬。その顔は何処かで見た覚えが……

彼は一層口元を釣り上げ人をバカにするかのような態度で言い放つた。

「アヴォンジャー（復讐者）のサーヴァント、アンリ・マコだ。」

この全ての悪つて言つた方が解りやすいか?

「誰か  
タスケテ……」

いやだ、イヤだ。

カリヤおじさんを思い出す。姉さんを思い出す。おじい様を思い出す  
センパイを忘れる。

体が疼く、魔術回路は黒く私を汚して行く、間桐が私を犯して往く。

誰でもいい、先輩にこんな私を見て欲しくない。

先輩の隣に居たい。

「助けて……先輩。」

地下室に充満する風に鉄の匂いを覚えた瞬間、何かが私の頬の涙を斬り払うように通り過ぎ

「…………！」

「…………！」

剣に貫かれたおじい様の体が燃え上がり悲鳴を上げている。

「トレスオン  
投影開始」

地下に響く鋼の声は次の瞬間、辺り一面に剣の雨を降りせる。

突き刺さる剣に床は砕け、砕けた場所にまた剣が突き刺さる。

埋め尽くせる剣はそのどれもが名剣、魔剣、聖剣の類だと一目で知れた。

「確認する。君が私のマスターに相違ないな？」

「え、は、はい！」

呆然としていた私に赤い外套を着た長身の男性、サーヴァントが近づいてくる。

ああ、このまま私も

「安心したまえ、……必ず君を救つてみせよ。私用は一時休止だ。

」

後ろに流した白髪に褐色の肌、何一つ類似点など無いこの

「おまはに」を離れようか。醜悪な匂いはそれだけで憎のような女性には不釣り合いだ。」

そう言ってサーヴァントは私を抱きかかえるとゆっくりとした足取りで階段を上り、地下室を出ると。

下から大きな爆発音が連鎖しながら響いた。

「サーヴァント、アーチャーだ。よろしく頼む、マスター。」

そのサーヴァントと愛しい誰かの頬笑みが重なって見えた。

まあ、集うがいい。聖杯と運命に選ばれし英靈よ。

今度こそ君の願いは

。

嘘予告 完

## Fate/Aven...予告（後書き）

設定としてはFate/hollow ataraxiaのアンリマユとは違う存在、この世全ての悪の罪を押しつけられた衛宮士郎のなれの果て。

アーチャーとは相似の関係にして衛宮士郎とは対極の存在。続かない予定。

## 設定（嘘）紹介

とりあえず今現在で考えがつて いる復讐者エミヤの設定です。

アヴェンジャー

マスター・遠坂凜

真名：衛宮士郎、アンリ・マユ

正義の味方を貫く中で戦争や災害を収束させ、多くの人々を救つてきたが、一切の報酬を要求しないその姿勢に周りの人間は恐怖心を抱き、やがては争いや災害を起こした張本人として仕立て上げられ、ついにはこの世全ての罪を着せられてしまつた存在。

その為、後の世で挙火教（ゾロアスター教）の悪神と同一視されるまでになる。

英霊エミヤは死にゆく運命にあつた100人を救う為に死後を世界と契約し売り渡したが、こちらは死にゆく運命にあつた100人が命惜しさに衛宮士郎の死後を無理矢理世界に売り渡した、望まぬ守護者。

第3次聖杯戦争のアンリ・マユは挙火教を信仰していたとある村における少年の亡霊であつたため、なんの力も持たない最弱の英霊で

あつたが、今回呼び出されたのは未熟な衛宮士郎のの能力を完成させた英靈エミヤと同じ存在なので魔術や宝具も存在する。

宝具：1・無限の剣アソリミテッド・ブレードワークス製

言わずと知れた英靈エミヤの固有結界。

但し、心像風景は巨大な歯車が回る剣の赤い荒野ではなく、黒い太陽から”泥”が滴り落ち燃え盛る地獄の鍊鉄場。

宝具：2・偽り騙し欺く万象

ヴェルグ・アヴェスター

対人法具、

受けた傷を相手に返す呪い。傷を共有する原呪術。

hōōの偽り写し示す万象との相違点として、傷を「写すところ」までは同じであり、アヴェンジャー本人が即死状態では発動出来ない任意型。

また、今回は相手に対して、新たな負傷個所ができる度に何度でも効果を発動でき、なおかつ呪いや魔術などの効果もそのまま移すことができるのがオリジナル要素。

但し、発動させるためには1度につき1回対象に素手で触れ”ある魔術”を使わなければ発動できない制限がある。

本人曰く「心中勝負じゃ教典の次を張れる」らしい。

## 嘘一話（前書き）

続けてみました。許して下さい。  
後先を考えない。そういう。

「遠坂凛よ」

とうあえず平静を装つて自己紹介を済ませる。

いい加減ションベンガキやらオネーサンではプライベートに銃弾がめり込む気分だ。

「トオサカ?……あ、トオサカねえ……んじゃあ凛たん?」

「たんは止めー!」

畜生め、何で私がこんな頭の悪い会話をしなけりゃならないのか。

「じゃー凛で。うん、いい名前じゃねーか。實にあんたらしげ名前だ。」

あれだけ馬鹿にしたセリフを吐いておきながら、口口口口と言葉を換えてくるあたりが素直に受け取れず逆にムカつく。

「…それじゃ質問を続けるわよ。私が知ってる限りじゃアヴォンジヤーなんてクラスは聞いたこと無いわ。おまけに聖杯戦争に神様が参加するなんてこともあり得ないと想つてるんだけど?」

「ベッシィビーダーでもいいじゃん。ほい、Q・E・D・証明回答終了」

「ざつけんじやないわよ!…いい?私はあなたのマスターであんたは使い魔。おまけに人の家の屋根を盛大にぶつ壊しておきながらそのふやけた態度!…いい加減真面目にしないと令呪を使つわよ。」

この手の輩との会話は頭に血が上る。間違いなく遠坂凛と子のサーヴァントの愛称は最悪だ。

「えー。俺だつて別に壊したくて屋根壊したわけじゃないんだけどよ?凛たんがうつかりにもこの家の上空に召喚しちまうもんだからぬートンの法則に従つてダーアイブした訳よ。アンダスタン?」

「な~にがアンダスタン?よ!…ちよつとうまく着地してくれるだけどこれ程修繕費が浮いたことか!…今月やっぱこのよ?宝石が下手したらダースで飛んでいくかもしないのに…魔術師が自ら破産で工房差し押さえなんて洒落になんないのよ!…」

「ま、ま、ま。落ちつけよ、凛たん。判つたつて。とりあえずは暫く屋根にブルーシート張つておいて地道に貯金じよづせ?」

「ムツキー!…こちいち頭にくるやつね!…いい?あんたが屋根を

修理していくことでこの散らかった部屋を片付けておきなやこー。」

「はあっ……なんですか……？」

どうやら諦めが吐いたのか、ぼつぼつと頭を搔きながら懸念をこぼすサーヴァント。

「それと、あんたはクラス外のサーヴァントなんでしょう？·復讐者つていうのはどんなスキルを持っているのよ？」

「うん。実は俺も良くしらねえ。何つか聖杯からの知識供給やら向やらは現代の文化とこの戦争の常識的ルール説明だけだつたんでな。アヴォンジャーのクラスなんてズズメの涙程度の情報しかなかつたぜ？まあ自分がどういう奴かは自覚出来るから、不便はないと思つけどよ。簡単に言つちまえ三騎士見たいな華々しさはネーな。」

なんだ、真面目になつてくれればしっかりと会話も説明もできる奴じゃない。

一応こいつも聖杯戦争に参加するから何せもあるのだね。

「つてことはアサシンみたいなトリックキーな戦法が得意つてわけ？」

「アサシンなんかと一緒にすんなよ。確かに俺は格下の戦闘力しかないけど、俺の宝具は心中に關しちゃ教典の次を張れるんだぜ？」

「？教典で、なに訳の分からぬことを  
なんていった？」

「あ？格下ってことか？安心しろよ。それでも三騎にだつてそう簡単に殺られるつもりはねーよ。まして人間相手なら確実に殺せるぜ？ヒューー！俺ってマジクール？」

「違うわよ！……心中とか言つて無かつた？」

恐る恐る自分の短期記憶を否定したいと願いつつ質問してみるが。

「ああ、心中だな。本来は相思相愛の仲にある男女が双方の一致した意思により一緒に自殺、または囑託殺人すること。情死ともいう。転じて、一人ないし数人の親しい関係にある者たちが合意の上で一緒に自殺すること。さらに合意のない殺人でも状況により無理心中

と呼ばれることがある。以上W.E.K.Y. た。ん？ じゃあ無理心中つて言つた方が良かつたのか？」

「なによそれえ！ ？ ？ まさか何回死んでも大丈夫、なんてスキルでもあるわけ？」

「おーおー、凛たん。そんな非科学的なことがあるわけないだろ？ 命はいつだつて一つなんだ。」

少年名探偵風に真実と置き換えても全然カッコいいとは思えない。と言つた本当にこいつは馬鹿なんじやないだろ？

「それじゃあその宝具を使つたら、あんたはどうなるのかしら？」

「こめかみの血管から筋肉まで余すことなく顔面が痙攣を起こしきつだ。」

「…？ あー、言い方が悪かつたか。要は死に切らなきやいってことだ。」

「ヴォルグ・アヴェスターって言つてな。オレが傷を負つたときには相手に触ると、それを相手にも与つて効果だ。だから致命傷スレスレのダメージを受けりやいくらい三騎士のサーヴァントでも俺と五分の戦闘をせざるをえなくなるつてわけだ。」

成程、そう言つたとか。確かにこの方法なら、最優のサーヴァント、

セイバーすら追い詰めることができるものかもしれない。

それに、ここぞとこいつの場面で令祝をつまく組み合わせて使えばなかなかの手札だ。

「なによ？ それなりにうまく立ち回れば心配するのはキャスターくらいいじゃない。」

「まあ、傷を受ければそのたびに相手にダメージを返すことができるしな。それに、受けた傷は同一人物じゃなくともいいし…但し、アーチャーとは相性が最悪なのが難点でな。」

「そうだ、アーチャーの本領は遠距離狙撃。今この一つの説明で考えれば、対象者との接近戦闘でなければ意味がなく、相手に触れることで発動するはこの宝具の使用は不可能だ。」

「接近戦闘の得意な弓兵なんて、そう都合のいい奴がいるとも限らないしね。やるとしたら、それこそこいつからうまく奇襲をかけるしかないってことね。」

「ケケケ。そう落ち込むなよ。宝具以外だつてちゃんと戦えるって。意外と器用なんだぜ俺？」

「あんたの見た目からまつとうな戦いを想像する方が難しいわよ。」

なんか今の時間だけでひとつ疲れた。

サーヴァントを召喚した時点で並の術者なら意識を保つのも難しいと言つから、案外持つた方かと思つ。

「それじゃあ、今日はほいのくじにして私は寝るわ。いいやんと掃除しておくれのよ?」

そういうのを利かせて部屋を離れる。

「 ハヒト。 チッ。 ..... わかつたよ。 やつておくから。 あと、 んな血室覗くなよ的な目で睨むなよ。 犯淫するなりやつとソソル女探すからね。 」

「お休み凜たん。」馬鹿にした声がそう最後に聞こえた。

「ひつ　　く、来るなあ！！わかつた、分かつたから。ぼ、僕が謝るつ、それでいいだろ桜！だから許してくれ！！」

赤い外套を着たアーチャーさんが尻もちをついて懇願する兄さんに一振りの剣を喉元に突きつける。

その瞳は侮蔑、軽蔑をひとしだしている。

「田障りだ、マスターの兄よ。早々に立ち去るがいい。もし次に我がマスターに不埒を企みでもしてみる。拷問すら生温く思える末路を味あわせてやるつ。」

「約束する！するから！！もうたくさんだ畜生つ！！　クソッ、くそつ……やつと僕が間桐の当主になれるつて、僕が魔術師になれる機会が巡ってきたのにっ！あの妖怪爺の奴あつさり死んじまいやがつてえ！！！」

うな垂れながら兄さんは床に拳を叩きつけ罵声を発する。

「こつもこつも……そうだよ、お前のせいだよ桜……お前さえい

なけりやこのはくが間桐の、マキリの当主で魔術師だつたんだ！それをあの爺の！親父のせいでその座を奪われたんだぞ！？」

それは何度も何年も聞いた言葉。

私が間桐になつてから、兄さんの夢を壊してしまつた日から毎日聞いて、傷を受けたときに聞いた言葉。

プライドの高い兄が自身を保つために吐いた怨言。

「それなのに桜あ……お前までこの僕を見下しつ、嘲笑いつ、馬鹿にするのかよ！？そのサーヴァントを僕に寄越せよ！－僕ならつまむやる－！聖杯だつてこの僕なら絶対に手に入れて見せる！－お前みたいな腰ぬけに、ドン臭い奴が勝ち残れるわけがないだろ？？

……頼むよ、……僕は、ぼくは……」

こひが罪悪感に押しつぶされそうになる。

兄さんも間桐のせいで金に曲がつてしまつた存在なの

「ふん、同情芝居ならもつとつまくやるんだな、小僧。なればこの家に在る魔道の英知を調べつゝし自らの手によつてサーヴァントを召喚すればいいだけの話だらつ。」

「な、あ－？」

アーチャーさんの鉄のようないつも冷たい声が兄さんの顔を硬直させる。

「そもそも、貴様が魔道に生きるにおいて知識のみを有すのであれば体を弄ればいいではないか。マキリだかの家柄は古きにわたる歴史があるのだろう？そんな覚悟もない枯れた臆病ものにつき従う道理はない。その点、我がマスターはその全てを耐えきる強さがある。望まず受けた仕打ちでもそれを経験しているのをしていないのでは天と地ほどの差があるのは明白だ。貴様にその気があるなら、何故その妖怪爺に名乗り出なかつた？」

「くう 煩い！！ 煩い！！ サーヴァントが僕に説教かよ！ そんなのは衛宮だけで十分なんだよ！…………出で行けよ」

「

アーチャーさんがその言葉を待つていていたという表情で口元を釣り上げる。

「聞こえなかつたのかよ桜……こつから出でていけっ……」の家に  
「僕のつ！！ 間桐から出でていけえ！！！ お前なんてもう間桐  
じゃない！！！ 一度とその名を使うな！！！ 間桐の当主はこの僕だ  
！！ 脳権が死んだ今、当主はお前じゃないこん僕だつ！！！ サーヴ  
アントでもなんでも連れて、落ち死んじまえ！！ は、ハハ  
ハッ。 そうだ、遠坂やアインツベルンだつて当然今回の儀式に参加  
するだろ？ さつ！ 死ね！ お前みたいな腰ぬけ、真っ先に殺されて終  
わりだろ？ ククツ、ハハハ…… 後悔しろよ桜？ 僕を見下した  
報いをこれから受けことになるだろ？」

ビクリと最後の怒鳴り声にすくみをうになつたけど、自然と恐怖は水のように流れ落ちるばかりで、憑きモノが落ちる。そんな気分だった。

「と言つ訳だがマスター？ もつこの家に居る用は… どうやら無くなつてしまつたみたいだな。」

その人は私の方へ振り返ると、してやつたりと言わんばかりの笑みで私に問いかける。

ああ、確かに形だけ見れば私は勘当も同然、間桐から縁を切られ、家も追い出される羽目になつたのだろうけど……今はこの行き場のない自由がとても温かい。

選択肢は無限にあり、万人が抱える苦悩すら愛おしい。

この赤い『兵』が、きっと先輩が田指すような

正義の味方なんだろ？

\*  
\*

「　　問う、貴方が私のマ　　ス、　　！　　？」

渦巻くエーテルの奔流からマスターの姿をとらえたとき  
時間が止まる思いをした。

大聖堂

ステンドグラス

見覚えのある光景

そのどれもが前回のはじまりの地、私の記憶そのままで

『クスクスッ』

そんな小さな笑い声を漏らしながら笑顔を向ける人物が……

「『機嫌よう、セイバー、久しぶりね。あ、…それともあなたにと  
つては初めましてになるのかしら?』

白い髪の少女、約束を果たせず別れた前マスターの娘

「イリヤ…ス、フィール……?」

「フフフ、よかつたあー。ちゃんと覚えていてくれたんだ。」

忘れる筈がない。この城で僅かな期間、共に過ごしたことも彼女の母を守り通すことが出来なかつたことも

「わあ、セイバー。…」「うん、アーサー王。聖杯戦争を始めましょ  
う。」

白い雪の少女はやう誘い私の手を取る。

確認したいことはたくさんあるが今は誓この言葉を紡いで。

ああ、あの時の戦いが… 終末は悲劇であつたがライダーやランサー  
の武功はいまでもはつきりと思に出せる。

今度こそ、誓いを護り抜いて  
騎士の剣にかけて。

今度こそ貴公の願いは

## 嘘2話（後書き）

破綻した組み合わせを考えるとさすがに一度Zeroのことを叩いた。  
これしかねえ。

そう思つて、イリヤのサーヴァントをバーサーカーではなくセイバーにしてみました。

士郎が誰を呼ぶつて……どうしよう……

## 嘘3話（前書き）

私的な衛宮士郎像です。違う点があれば許してください。

衛宮士郎は魔術師なのだろうか

彼を見たことのある魔術師がいるとしたら、殆どが否定するだろ？

彼は魔術師であることが生き様なのではない。

正義の味方になることが目的なのだ。

歩道橋を上る老人がいれば手を貸しあぶり。

道に迷っている人がいれば進んで話しかけ、道を教え。

学校で困っている学生、生徒など最早我先へと彼を頼つてやつてくれる。

放課後はアルバイトに精を出し、他の従業員の何倍も仕事を引き受け。

休日になればボランティアに出向く始末。

こんな人物が魔術師なわけない。

魔術師と言うものを知つて、いようと、万人が同じ答えを口にするだろう。

詳しいものが近くを通りても、そこには魔力の残滓など欠片もない。

強引に拉致でもして体を知れれば、それこそ魔術回路の一本でもあるかもしれないが、そんなモノ街中の2・300人を調べれば稀にあることだ

衛宮士郎は魔術師なのだろうか？

「同調、トレース・オン開始」

解は肯定。

声の場所は彼の暮らす家の庭にある土蔵から。

誰もいない真夜中に響く、一工程のトリガーワードはその存在が魔道に生きる者の証明である。

脊髄に流れる液体が急速に冷却されていくような背骨が発火炉のように身を焦がしていくような、今日も始まる衛宮士郎の命がけの魔術訓練が始まる。

彼は知らない。

こんな行為、魔術師のすることではない。

彼は知らない。

魔術の何たるか。

彼は知らない。

養父が魔道を正しく教えなかつたことを。

知らずに10年近くも間違つた訓練を続けている。

止める者はいないのだろうか？

そんな者は一人としていない。

彼はこの世の魔術師を、魔術を知るものを一人しか知らない。

彼の養父にして故人、衛宮切嗣しか知らない。

故に彼は魔術のほとんどを知らない。

否、使えない。

覚えていないモノも僅かにあれば、扱えなかつたモノは大半を占める。

ただそれのみが衛宮士郎の扱える魔術である。

但し、成功率は1%を切る。

繰り返そう。

衛宮士郎は魔術師なのだろうか。

そもそも、彼は何故魔術師なのだろうか？

「正義の味方になりたい。」

この一点の目標の為の道具として、魔術の訓練をするにしてもえらく矛盾している。

紙切れ一つ存在強度を強化するにしても、彼がそれを成功させるに

は小1時間かかる。

効率云々の問題ではない

無駄の極みである。

借りに成功しても失敗しても、それが何になると言ひのだらうか？

彼が目指す正義が視えて来ない。

「誰かを救える、誰もを救える存在になりたい。」

目標が、目的が定まらない。

彼の学校が学年に配布した進路希望調査表

いないのは彼を含めた数名のみであった。

提出期限はとうに過ぎている。

しかし、それについて彼に指摘するものはいても、気遣う者はいな  
い。

皆、わが身の将来を考え体のいい便利屋として利用できればそれで満足だ。

通行人も、アルバイト先の同僚も。

そう、彼の周りこそ魔術師の「とき立ち振る舞いなのに衛宮士郎はまるで一般人のようだ。

利用されこき使われるなどそれこそ魔術師ではない。

ならばそれこそ彼が望む正義の味方なのだろうか？

報酬も褒賞もなく、只々まるで機械のようにその身を削りすれ減らし廃棄物になり果てるまで止まらない存在こそ彼の目指す正義なら、それは最早人の所業ではない。

人が歩む道を逸脱しているどころの話ではない。

道すら歩まず、虚空をもがく人でなしだ。

これほどの凶行、まるで魔術師の「とき茨の道だ。

つまり

どうやら衛富士郎は魔術師の様な奴なのだろう。

そんな魔術師とも呼べない衛富士郎はとあるアルバイト上がりの夜、何気なくいつもとは違う空気を感じた帰り道の路地裏で

「 い、 じょうぶ ！ ！ ？」

また、何時ものように、御節介よろしくと曲がり角の傍らで倒れる人物を助けようと声をかけていた。

これが衛富士郎の日常。

どこの誰とも知らない見知らぬ他人を放つてはおけない、破綻者の凶行。

そんな行為も、今回ばかりは状況が違った。

倒れていた人物はまるで人間なのに、その体は今にも消えてなくなるのではないかと言つほど  
否、これは比喩ではなく

本当に体が透け始めている人間らしきモノに衛富士郎は声をかけて  
いた。

しかも、こんなことが日常で起こりえることなどまずあり得ないの  
にもかかわらず、衛富士郎は若干の驚きと戸惑いを見せるだけで、  
行為 자체がえらく日常的であるかの如き態度であった。

衛富士郎は奇跡起こせぬ魔術師だ。

ならば、これはきっと分かれ道なのだろう。

その身が正義であるのか悪なのかを決める、運命の歯車が狂いだ  
した瞬間だった。

「俺は助けるよ、正義の味方になる為に

」

たとえ、この世全ての罪を背負う事にならうとも。

## 嘘3話（後書き）

\*アンケートっぽい何か\*  
?キヤスターはお姉さんだ!!  
?キヤスターと言つたらJKだろ。  
?キヤスター＝口りいた（悟り）

同志の説得とはここまで心を揺さぶられるものなのか。  
一番多かった？の語りキャスターで行きます。  
ご協力ありがとうございました。

「おい！大丈夫なのか！？？しつかりしるーー。」

どうしたら助けられい？

どうしたら助けられる？

喧嘩でボロボロにされた学生や酔っ払いのおっさんを介抱した時と似たようなシチュエーションだけビ、こんなパターンは初めてだ。

そこに居たのはボロボロの黒いローブを身に纏つた、見た目の幼さが際立つ美少女。

目の前の少女は外国人なのか、淡い紫白の髪に今まで見たこともない様な変わった形の尖った耳、そして外見はどこからどう見ても俺と同じ世界、魔術師をイメージさせる黒いローブに身を包み、背中をビルから伸び張り付く配管にもたれかかり荒い息を上げてこる。

いいや、そんなことはどうでもいい。

それよりも一番問題なのが 少女の体が透けて……まるで消えかけているみたいだ。

人が消える…………死ぬって言うのか？

冗談じやない、衛宮士郎は魔術師であり正義の味方だ。

助けないなんて選択肢はあり得ない。

まして、こんなに苦しんでいる少女を見捨てれば、衛宮士郎はその存在意義を見失ってしまう。

バイトの賄いでもらつた、弁当の入ったビニール袋を脇に投げ捨て少女のか細い肢体を抱え起こす。

それは正に質量を失つていいかのように、その存在が無くなっているかのように重さを感じない体だ。

だけど掌から伝わる少女の柔らかさ、体温、幼さから来る香りが確かに現実だと主張する。

何が何なのか解らないけど

落ちつけ。

幸い時間は夜でここは人通りもない路地だ。

魔術を使っても目撃者はいない。いや、例え誰がいようとそんな事を気にしていたらこの人は本当に助からなくなつてしまつかもしない。

こんな不可思議、救急車に乗せて病院へ連れて行つても処置なんて出来るわけがない。

ならば血の手ですべつしかないだろ？、衛宮士郎。

田の前の少女を救えるかどうか、ここから先は口との勝負だ。

「トレス・オン  
同調・開始」

衛宮士郎を現す言葉を紡ぎ、意識を己の中へと埋没させる。

いつもならたつぱり30分はかけて作り上げる、魔術回路を起動させるためのスイッチを　　工程をすつ飛びして一気に組み上げる。

ビギン！

頭の中で何かにひびが入るような音が聞こえる。

構うな鍵がパズルのよくなっているなら無理矢理にでもねじ込み  
こじ開ける。

ＺＺザツ！！　　ヽ、ガーツ  
ギギギイＺガツ！！！

！

体と頭で五月蠅いノイズが聞こえる。

どつでもいい、とにかく急ぐんだ。

「接続・開始」  
トレス・オン

無理矢理繋ぎ止める意識を今度は一度も使つたことのない精神同調  
に近い魔術を使つたため、必死になつて心臓の鼓動を弱める。

視界がチカチカして、それでも氣絶に耐えるのはひとえに目の前で  
苦しそうにしている少女のおかげだと思つ。

不謹慎なのは百も承知だけど、それでもその人が今までに見たこと  
がないくらい美人で可愛くて、幼ない少女からこんな感情を掻き立  
てられるなんて間違つていると思いながらも　　男なら目を  
離すことが出来ないくらいだ。

とたん、視界が一瞬暗転する

# 聖杯戦争

スターズさん&amp;て  
%&a  
m p;  
て k

$$= \pi \sqrt{1 - \frac{2M}{r}}$$

卷之三

ね

「アガツ

果たして、意識を手放したのがほんの数瞬だったのは僥倖だ。

今の数秒で切り上げていなかつたなら間違いなく脳の神経が全て細切れになるまで千切れていただろう。

だけど必要なことは直感的に理解できた。

そして、俺は自分の唇を躊躇いなく噛み切り。

解っているのか衛宮士郎。

その行為は例えこの少女を救うためとはい

解つてゐる。でも、こんな可憐い子が死ぬなんて間違つてゐる。

ああくそ。自分でも、もう何を言つてゐるのか解らないくらいだ。

悩む時間はもう終わりだ、これからは正義の味方を成す時間だ。

最後に一層少女を自分の胸に引き寄せ顔と顔を接近させる。

消えかけている少女の僅かな胸の膨らみが自分と密着し、鼓動と鼓動が重なり合ひ。

よく見れば、少女はボロボロのローブの下には何も来ていない状態だった。

その事実に気がつくと心拍数が馬鹿みたいに跳ね上がり、顔が熱くなる。

少女の体の柔らかさに加え、殆ど直に近い胸の感触の興奮に理性がぶつ飛びそうになるが、歯を食いしばってギリギリのところで繋ぎ止める。

そして、滴り落ちる魔力を詰め込んだ血を

彼女と唇を合わせることで強引に流し込んだ。

それは時間が止まるかのような感覚だった。

美少女と話す10秒とストーブの上に手を置いた10秒は時間の感じ方が違うと聞いたことがあつたけど、こんなのは正反対もいいところだ。

この瞬間が永遠にも似たような、そんな錯覚。

柔らかな唇の感触は俺にとっては初めての経験だ。

こんな事、一生忘れることがなくてできな「くら」の気持ちよさで、胸が高鳴って

これが衛宮士郎の初めての正義で、初めての罪。

こんな姿、魔術の秘匿云々の前に警察に捕まるだろ。

大いに結構だ。それでこの子が助かるなら俺は喜んで引き受け背負おうじゃないか。

明日から町での俺の代名詞（異名）は

『少女性愛者』になっちゃうだろ？。

それが俺と彼女の出会い。

その時はまったく気がつかなかつた、いつの間にか自分の手の甲に浮かぶ奇怪な痣のような刻印に。

衛富士郎は罪を背負う。

少女は何処までも悲劇で、俺は何処までも愚かだった。

千を救おうとして五百を取つゝはすのなら

それは嘗て正義の味方を志した者の言葉。

それを俺は、

を切り捨てて、  
を護り抜こう。

未だ認められずにいた。

当たり前だ、この身は剣なのだから。

## 嘘4話（後書き）

士郎は悟りキヤスターの体内に向かって自らの液を注ぎ込む。  
と言ひ訳で士郎悟りに目覚めるの回でした。

それにしてもJKキヤスター人気無いのな（笑）  
NG扱いになるけど第4の選択肢を忘れていた。やらないけど  
？ウツホ！いい漢

## 嘘 5話「R・15」（前書き）

今回は残酷な描写、人道的倫理観をかなり無視した表現があります。  
苦手、嫌いな方はブラウザでバックすることをお勧めします。  
こちらを見なくてもストーリー上問題ないようにしていきますので、  
ご安心を。

最初にこの時代この世界に呼び出され、最初に田を開けたとき元

田の前に居たのはおおよそ人の持つ醜悪さを全て併せ持つたかのような、下劣な男の魔術師だった。

男は私の姿を見た瞬間、何が気に障ったのかいきなり表情を険しくし、舌打ちをするとカツカツと背を向け離れて行ってしまう。

まるで私に対する興味を信頼を、信頼を失つたかのように。

まだ一言も言葉を交わしていないのにそれは無いだろう。

呼び出された場所である、振るい廃屋のような部屋の隅には何人も裸体の女性が淫具と男の白濁にまみれて放置されていて、そのどれもが精神のほとんどが死にかけたことは一目で知れた。

「最初の仕事だ、掃除（食事）しておけよ」

男は怒った声でそれだけ言い放ち部屋から出て行ってしまう。

何だと言つのか。この私に、人に仇なし恐れられた身とはいえ仮にも英靈である自分に、こんな壊れた女性たちの精神を食らつて殺せと言つのか。

いくら魔女と言われた私でも、こんな仕打ちを受けるために聖杯の呼びかけに応えたわけじゃない。

しかし、田の前の女性たちは薬と魔術によつて心まで犯しつくされてしまつてゐる。

もう、心に光は灯ることすらない。

「…………」めんなさい、どうか恨んで……恨めるだけの心を持つて逝つてしまふだい。

体を満たす魔力を不快に思つた事などこれが初めてだつたけど、この味は彼女たちが生きていた証。絶対に忘れたくないと思つた。

「令呪を持つて告げる。若い女を20人ほど攫つて來い。俺の用がすんだらお前に食わせてやる。」

最低な魔術師だ。こんな肉欲にまみれたゴミ屑なんて早々に他のサーキュレーションに殺されてしまえばいいえ、そんなことを待つていることすら億劫だわ。

殺してしまおう。裏切りは私の象徴。本当に嫌いな呼び名だけど、思い知らせてやる。

自身が呼び出したキャスターがどれ程の存在かを……

令呪の縛りに無理矢理町の女性を攫いながら、そう心に誓いを立てる。

しかし、そんな私の計画はひと組の襲撃者にあっさりと台無しにさせられる。

「ギャハハッ

「馳走をまだ、殺しに来たぜえ……！」

廃墟に乗り込んできたのは全身に奇怪な刺青を彫り込んだサーヴァント。

両手には猛獸の爪を思わせるこれまた奇怪な短剣。

「キャスター……なにをしてる、早く殺せ……殺しやがれ！……」

動搖するマスターがみつともなく叫ぶ姿に思わず笑みがこぼれる。

ええ、ご命令のままに殺して御覧に入れましょう、マスター？

ただし

目の前に居たマスターの背中に私の宝具を、ルールブレイカを突き刺す。

神代の魔女を舐めた愚かさをその身で知れ。

サー・ヴァンとしての契約が切れた一瞬で、私はマスターが持つ二

画の令呪をはぎ取り自分の手に移植する。

その流れるよつた裏切り行為にマスターだった男は顔を青くし

「御機嫌よう、マスター（愚か者）」

私は男の体を渾身の力を込めて刺青のサーヴァントの前に突き飛ばす。

ザマアみる。私はこれで自由だ。お前なんてもう用済みだ。

心の中で笑いがこみ上がる

と、その瞬間

「何だあ？よつたによつたの俺に擦り付けよつたか？  
ハツ、上等上等！」

その罪　　オレが貰つぜ？

一瞬にしてぐぢゅぐぢゅの肉塊に成り果てる男の体

頭蓋が一面に巻き散らかされ、臓物は細切れで、手足なんて割き鳥賊みたいになつて、ビショシリと血に濡れた音を立てながら床に重力に従つて崩れ落ちる。

今のはなんだ?

クラスは解らないが、今の攻撃を推測する限りではアサシンかバーサーカーか。

ビリビリにせよこのままじゃ私は長くは限界出来ないしこのサーヴァントとの戦闘も不可能だ。

どうする、どうすれば?

「あー、ツマンネ…………そうだ、お前に一つ質問なんだけよ? サーヴァントを死姦するにやどりしたらこいつのかね? ぶつ殺しても後が楽しめないんじゃ達成感なんて零ジャン?」

……なんてことを言つ出すサーヴァントだ。こいつは英靈と言つよりも邪靈と表現した方がいい気がする。

「おこおこ、ロココ子サーヴァントよお、シカトすんじゃねよ。援交をせんわ?」

「……あなた、最低ね。流石の私もここまで品性が崩れた人物を見るのは初めてよ？」

「おお、やつと返してくれた言葉が詰るつて、さてはうだな？だけどこりやお前が望んだ応えの一つでもあるんだぜ、言つてしまえば俺が免罪符だ。ヒヤハハッ！！」

私の望み？

免罪符？

何の話だ？やつぱりこいつ、ビックかおかしい。いや場所は主に頭だらうけれど。

「だつてよ……おまえ、自分がしたことに後悔してる顔じゃねーか。

」

ドクン、と胸の鼓動がひとときは高鳴る。

クズなマスターとはいえ、裏切り死に至らしめ、嫌厭でも罪なき人間を喰い荒し、 壊し

そんな最低な行為がかすんで見えるほどの残虐を田の前で堂々と見せつけるサーヴァント、私の裏切りを容認し私のマスターを殺した男。

「んじゃ、後片付けもしどくかな」

そう一一やけながら答えた田の前のサーヴァントはバチンと指を鳴らすと

部屋の隅に居た、心が壊れてしまった女性たちに無数の剣が突き刺さる。

まるで機関銃によってハチの巣にされるよう

「さて、これで最悪は」の俺だ。…………口ひとつ子、残りはお前だけなんだけどよ……死ぬか?」

その言葉を言い終わると同時に部屋から廊下へと繋がる鉄の扉が勢いよく蹴り開けられ、一人の赤い少女が息を荒らげながら田の前のサーヴァントに殺氣を放つ。

「アヴォンジャーーーー!

ツ……?…………これはどうこいつ」と

？」

部屋の隅で血濡れの女性たちだったモノを見たサーヴァントのマスターと思われる少女が殺氣を向ける。無論彼にだ。

「おいおい、ずいぶんと遅い到着じゃねーかよ凛たん。遅過ぎるから敵のマスターぶつ殺してそこらにいた女も勢い余つて犯っちゃったよ？」

「アヴェンジャー！！！ 私はキャスターをしとめなさいと指示した筈よ。」

それにしても、アヴェンジャー？ なんだそのクラスは？

そんなクラス、聖杯からの知識にはなかつた筈だ。

一体このサーヴァントは何だと言つのか。

「あーあ、せつかくの殺人もこれじゃ興ざめだ。……つてわけなんだけどよ？ キャスター、やつぱ殺すわ。」

そう言つて全身刺青のアヴェンジャーは私に向かつて右手を突き出してくる。

死にたくない

途端にこみ上げてくる恐怖。

信じられない、自分にもまだそんな夢を見る心が残っていたのか。

こんな絶対的な邪悪の前で思い知られた。自分が悪だと思っていた罪だと思っていたことはなんてひけだったのだろうか。

こんなやつ、マスターがいれば何とか切り抜けることも倒すこともできたかもしれないのに、私は自らその可能性を放棄してしまった。

それこそ罪だ、こんな汚れた願いなんて最初から持たなければ

「ヒヒヒ、何だア？まだ足りねえのか？」

アヴェンジャーがそう亥くと私との距離を一瞬で詰め、私のローブの下の服を掴むと力任せに引き裂き始めた。

「なー？何やつてんのアヴェンジャー……！」

「ヒヤハッ！見て判んねーのかよ？口リツ子でも使って慰めようか  
なつてなつ……ギャハハ、俺つて天才？」

一見高校生くらいの見た目なアヴェンジャーだがやはり英靈、その筋力はこんな年端もないかない姿の私じゃ魔力で力を強化しても太刀打ちできない。

されど侮るなよ復讐者、この身はキャスター（魔術師）だ。

その身は攻撃に転ずるとなれば現代には失せたる神秘を持って汝が身を消し去る。

接近しているアヴェンジャーの下腹に右手を添えこの身に残る魔力を絞り出してランクAの魔力をもつて全力で撃ち抜く。

とつたの反撃に気がついたのか身を捩るアヴェンジャーだが遅い！！

閃光とともに彼の左わき腹がごつそりと吹き飛ぶ。

アヴェンジャーの表情が驚きと苦痛に歪み直後

この世のものとは思えない邪悪な

優しい笑みを浮かべ

# 「偽り騙し欺く万象」

「象

突然頭の中で鳴り響く呪いの力——バル。

そして私の体に彼と全く同じ傷が左わき腹が二つそりと吹き飛び

「さつさと行けよ、キャスター」

そう小さな声で言いながらアヴェンジャーは私のロープを掴み体ごと天井近くに合った硝子のない窓から放り捨てた。

ああ、彼はなんて悪なのだろうか。

その身がどんなに罪で汚れようとも、悪人で敵の私さえ逃がすためにこんな茶番を演じたと言うのか。

その姿は今まで見たどんな者よりも英雄で

無実の罪人（正義の味方）だった。

残酷で優しい、ぶつ壊れたアヴェンジャーを表現するのって難しいです。

復讐者が背負つたのはこの世全ての罪。

少女の罪まで自らが肩代わりし免罪符として奪い取る。

因みに復讐者エミヤは原作本編のどのルートとも違う衛宮士郎の末路の設定で行きます。

## サーヴァントステータス（前書き）

キャスターの愛にあふれて生きるのがつらい。

## サーヴァントステータス

現時点でのサーヴァントステータス

本編とは若干違います。（アヴェンジャーはデータがないので適当）

クラス：セイバー

マスター：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

真名：アーサー・アルトリア・ペンドラゴン（身長154センチ・W73（A）・B53）

ステータス：

筋力A 耐久B 敏捷B 魔力A+ 幸運B～A 宝具C、A++  
：対魔力A 騎乗B / 直感A - 魔力放出A カリスマB -  
傷心中につきカリスマ・直感低下中。でも強い。

クラス：アーチャー

マスター：間桐桜

真名：衛宮士郎

ステータス：

筋力B 耐久B 敏捷C 魔力A 幸運C 宝具E～A++（複製物は1ランクDOWN）

：対魔力C 単独行動A / 千里眼B 魔術B - 心眼（真）

A -

遠坂凜がマスターのときに比べステータスが全体的に高くなっている。

クラス：キャスター

マスター：？？？

衛宮士郎

真名：メディア（身長135センチ・B69（C）・W47・H6

5）

ステータス：

筋力E - 耐久E - ～B（魔力強化時のみ） 敏捷C + 魔力A -

幸運B + 宝具C

：陣地作成A + 道具作成A + / 高速神言A + 金羊の皮E

X（制限）

ステータスは衛宮士郎と契約した時点でのものです。口リですが  
身長と比較して胸はある方。

（因みにイリヤ：身長133センチB61（AA）・W47）

クラス：アヴェンジャー

マスター：遠坂凜

真名：衛宮士郎、アンリ・マユ

ステータス

筋力C 耐久B 敏捷B + 魔力C 幸運E - 宝具D - 、E～A

+ +（複製物は1ランクDOWN）

：対呪術A + + 復讐行動A / 千里眼C - 戰闘続行A 心

眼（真）A 勇猛C

対呪術に関しては呪いの類に限り、本人が受け入れなければ一切  
を無効果する。

復讐行動は一度戦つたことのある相手ならば相手の攻撃ステータ  
スに対して1ランク耐性がつきこちらの攻撃ランクにも+補正が入  
る。

## サーヴァントステータス（後書き）

新しいサーヴァントが出たときに追加して行こうかと。

## 嘘6話（前書き）

三者三様の夜。

それは人生のピンチであつたり、決意の意思を固める時間であつたり、ロリコンだったり。

依然気を失つたままの少女を抱えて衛富士郎は夜の街を走る。

向かう先は無論衛富宅だ。

もしも目撃者がひとりでも現れたら、その瞬間に衛富士郎はその社会的生命は終わりを迎えることになる。

『夜遅くにロープの下が裸同然の外国人で推定年齢10歳の少女を自宅へと拉致しようとしている青年。』

どう考へてもヤバ過ぎる。

故に全力疾走

魔術回路はこの瞬間にも焼き切れるのではないかと言つぽど体に魔力を叩き込み、100メートルを7秒で駆け抜ける。

もしも教会や協会の者がいれば血眼になつて彼を殲滅するだらう。

魔術使いも大概にしようと。

そんなこともお構いなしに走り続け息も絶え絶えのばて氣味になつてきたり

「…………衛宮か、こんな時間に何をしている…………？」

田の前に屈強で無表情な、衛宮士郎が通う穂村原学園がほこるマーチ・クール（勝手に命名）ひと葛木宗一郎がいた。

『せ、葛木先生！？まあい、どうすつやいい？』

頭の中で一気に思考回路が唸りを上げる。

どうする、ここで事情を離して助けてもらひうか？

だめだ、先生を魔術の世界に引き込むなんてことは出来ない。

ならあたりをわりのない嘘でじまかすか？

どうやつてまかせばいい！？ロープの下が裸の女の子抱えて走つたこの状況をどうやつてじまかす？

痴漢に襲われてたこの子を助けて逃げてましたとでもいうか？

それって俺が犯人じゃないか！－今までに第3者視点は俺が少女誘拐犯だ。

「……事情があるなら話さんでもいい。 確か衛宮は独り暮らしだったな？」

その空氣を読んでるんだか、ぶつりきりつて投げ捨てているのか解らない雰囲氣で葛木先生は俺と共に歩きだす。

「余計な警察沙汰は私も好まん。お前の行動内容が確認出来たら私は帰る。」

「おい、あんた教師だろ。と突っ込みたいが、自殺行為を進んで行う理由もなし。

変な勘織りをしてくれなければ、家に運び終えるまでに上手い言い訳を考える時間が稼げる。

\*

\*

私は歩く。夜の街をひたひたと、行く当てを考えながら、身の回りの物をひとしきり詰め込んだキャリーバッグを引きながら。

「こうなつてしまつたのは単衣に私の責任だ、半ば無計画過ぎたことをしでかしてしまい謝罪の仕様もない。」

「あ、アーチャーさん。そんな落ち込まなくて大丈夫ですって。  
……その、暫くならせ……藤村先生、そう、学校の女の先生の家に頼めば泊めていただけると思いますし。」

なんとか私はアーチャーさんを励まそうと自分を空元氣で取り繕つ。

今が聖杯戦争の真つただ中でなければ、”アレ”がなければ多少無理を言つてでも勇気を振り絞つて先輩の家に押し掛けることもできたかもしないのに。

まだだ、とアーチャーさんは言い、私もその考えにすぐに思い至り

賛同した。

アレで死ぬはずがない。

妙な確信と嫌な予感がいり混ざりながらそう断定できるのは、私の胸の奥に潜むカリヤおじさんの『届かなかつた欠片』が如実に物語つてゐるからだ。

『チャンスを待つ。この戦争が局面に差し掛かれば必ず奴は”動く”だろう。その時に確実に仕留める。』

その為には聖杯戦争に参加し勝ち残つていかなくちゃいけない。

おじい様が動く状況の中に自ら飛び込んでいく。それは既に殺し合いの中へと身を投じることだ。

それは勇気の足りない、臆病な私にとって何よりつらいことだけだ。

だけど諦めない。

「君を救う、元より聖杯に願うべき望みなど持ち合わせていない身なのでな。その意味で言えば、マスターのサーヴァントに成れたことは僕倅といえるだろう。」「

こんなに死んでしまったアーチャーさんと並んでいた運命を信じて、私の過去を終わらせて全てをNero（始め）にしてやる。

そう思いながら、一先ずの宿としての頼みの藤村先生の家へと向かった。

\*

\*

「言ひ訳を聞いたから、何でこの女人たちを殺したの、アグウェンジャー。」

いま、私の心は怒りのあまり冷え切っている。

目の前のサーヴァントが女性をめつた切りにして殺した。

確かにキャスターのマスターが根城にしていた場所にいたからには何らかのトラップと考えての行為かもしないが、この殺し様はあまりにも人の行為を逸脱している。

バラバラ、なんて言葉すら生温い有様だ。

20～25人はいるであろうその死体は原形をとどめているものなど一つもない。

「んー。 気分 」

こいつは気分で殺戮を行えるのか。

「ふざけないで、あんたがどんな英靈だろうと私のサーヴァントである以上は私の流儀に従いなさい。殺人は絶対に認めないわよ。敵マスターも私が許可したとき以外許さないわ。」

「ヒヒ、何だよ？令呪でも使ってこの俺を縛りつけてみるかい？アシリ・マコ（この世全ての罪）のこの俺に？」

確かにこいつは自称「この世全ての悪」だ。そつ名乗る以上、悪行

も平然とやつてのけるだらうと思つていたけど、ここまで醜悪とは思わなかつた。

「次にこんな真似をしてみなさい。私は迷わずあなたを自害をせんわ。」

「ヒヤハツ！いいねえその響き、ぞくぞくしちゃうぜ。なんやかんやブチ切れモード入つておきながらも魔術師な凜たんの優しさに涙が出来ちまう。……まあいいじゃん、キャスターのマスターも無事にぶつ殺せたわけだし、キャスター自身も致命傷。俺と同じく横つ腹をじじつそりと遣つたんだ。持つて30分でくたばるだらう。」

そつ、こいつの宝具『偽り騙し欺く万象』は触れた相手に自らの傷を[引]す。

『引された傷はその時点で相手に自らの傷と確定させ。アヴォンジャーとの因果から切り離され独立する。

私の宝石魔術を用いてアヴォンジャーの傷を即座に癒せば相手は致命傷の怪我を負つたまま全快のこいつとの戦闘再開となる。

更に利点として、こいつの宝具は真名解放の使用魔力が極端に少ないことが最大のアドバンテージだ。

何でもランクが「D-」と、本来なら高い対魔力を持つサーヴァントなら弾き返してしまうにじやないかと思うほどどのレヴェルの低さ

と思われるこいつの宝具は、発動条件の縛りが強すぎるとかの理由で、有効対象は広いらしい。

それにしても気になることは他にもある。

「で、何であんたは本命のキャスターにじごめを刺さずに投げ捨てたのかしら？」

「そ、最大の謎はそこだ。こいつはキャスターのマスターや部屋に居た女性たちは皆殺しにしたのにキャスターだけはその手に掛けなかつた。

おまけに私の命令を半ば無視する形での幼い姿のサーヴァントを犯そうとしやがつた。

まさかとは思つけど……

「や、なにをわかりきつた事言つてんだよ凜たん。んなもん答えは一つじやねーか。」

「アソツにも聞いたんだけどよ、サーヴァントを死姦するこやぢつしたらいいかつて考えててな。キャスターのクラスに納まるくらいの口りつ子だ、もしかしたらつまい方法でも考え付いてくれんじや

「ほう、……つまりあなたはその為にキヤスターをひん剥いて逃がしたと？」

「あつたりまえじゃん。ああ、もちろんそれだけじゃねーよ？勿論欲情だつてしたさ。アイツ見た目によらず胸もあつてさ、こはあつたぜ？ Aの凛たんと比べても、これを襲わない奴はいないだろつて。ほら、よく言つだろ？悟りは殺さず犯さ

「ハーフロリコンだ……！」

中学生をババアと呼ぶ奴に違いない。

キャスター。今だけあなたに同情するわ。今だけこんな奴に  
襲われたことに謝罪したい気分だ。

「それにして、あの幼い姿でしょ？」  
が沸くわ。

願わくば、そのまま死んでくれればこれ以上こんな変態に襲われる  
こともないだろ？。

それじゃこの町にこいつみたいなロロコンがいなければの話だナゾ。

まあ、今はこの殺戮現場の隠滅が先決か。

氣は進まないけど性格どぐされ外道神父に連絡を入れるとしよう。

## 嘘6話（後書き）

という訳で衛宮士郎人生最大のピンチでした。  
アヴェンジャーがエロい。どうにかしてくれ。  
だけど、キャスターにだつたら私は襲いかかる自信がある（キリッ！  
そうだ、ワカメをカツコ良くしよう。唐突にそう思つてます。  
書きながら続き考えます。

## 嘘ノ話（前書き）

ハンツ、この僕がカツコいって?  
なめた口きくなよ。  
いつもの事じやないか。

たつた一人の少年が今宵英靈を呼び出す

たつた一人になってしまった少年が召喚するは役割を放棄した器  
役割の破綻した存在

されど汝は

その眼を混沌に纏らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。

我はその鎖を手繕る者

召喚の詠唱に挾まるは狂氣の言の葉。

かつてこの場所で、10年前の同じ場で間桐に連なる者が発した狂氣の呪文

それは血口を蔑にし、血口を貶め、血口を殺し、自我を狂気に墮とす狂化の詠唱。

召喚者の魔力を食いつぶし、自らの能力に制約をかけるとともに、限界の籠を壊す魂の牢獄。

狂え

狂え

召喚に媒体は必要ない

そんな物はいらない

ただその一瞬において間桐の英知を呑み干した少年は確信を得ている。

今この状況において誰を呼び出すかを

ダレヲ狂気に落とそうとしているかを。

少年は上半身の服を全て脱いだ、半裸の状態で右手に古い本を持ち詠唱を続ける。

描かれた魔法陣は追い出した妹の血で描かれたモノに自身の血で一部を書き足した、通常よりもさらに複雑な召喚陣。

ある意味使いまわしにもかかわらず、その陣から今まで現れんとする召喚の光は正常に起動していることを意味する。

「…………ブグウ…………ゲヒッ……うくじょい……ツ  
…………」

少年の体中から血がブクブクと吹き出るみたいに溢れてくる。

普段の少年ならその事実だけで無様な声を上げ、取り乱し卒倒してしまう筈なのだが、今夜はそのような影は何処にもない。

少年は険しい目つきで、搖るきない信念を持った狂気の瞳でただ前を見つめる。

「…………流体制御、覆水洗礼照準。」

その言葉と共に流れ続ける赤はぴたりと止まり　ウゾウゾと、まるで化生の類のよう、蟲のように少年の体を這いずりまわり紋様を作り上げていく。

「オドよつマナの道を経て大海を埋める。」

ギリギリと血でできた紋様があるで少年の体を縫め付けるよつこ、  
その肉へと喰らいつき沈んで逝き、まるで刺青のよつこ、まるで刻  
印のよつこ

まるで神経のようになにかでさしてじつうじつこるか  
のよつこ

少なからず自身を持っていた貌に、『』を引くための引き締まつた体  
に、焦げ付くように刻まれる文様はこの世全ての悪とは違つ。

それは己が家の滅んだ証。

間桐の当主にのみ許された刻印の複写。

既に、そんな奇跡の領域に手が届いているにもかかわらず、少年は  
聖杯戦争を追い求める。

「来い！…狂戦士イ！…！」の僕に、この僕が…間桐慎一が最  
強であることをお前が証明しろ！…！」

この僕を魔術師にしろ

そう高らかに願いを口にする。

この所業をもつてしても間桐慎一は己が身を魔術師と認めない。

魔術師とはどのような存在であるか、彼は知らない。

それが見てきた世界の魔術師はたつたの2人。

500余年を死せる生なき蟲の祖父、間桐の妖怪こと間桐臘硯と  
嘗ての盟友であり、かつてその姿に恋心を抱いた遠坂6代目当主、  
遠坂凜のみ。

外道の魔術師である間桐臘硯はさておき、遠坂については自分の事

を魔道に連なるものとみてすらいない為、魔術師としての姿を晒すことなど只の一度としてなかつた。

否、魔道がただ研究と時代の遺産を残すという形でしかないモノとするなら、遠坂の在り方は正に術師なのだろうが、間桐慎二はそれを知らない。

故に、今の何も解らぬ自分は魔術師では無い。

知らない。間桐の英知にも、そんな魔術師とは何なのか？などという禅問答な資料など影も形もない。

あるわけがない。

だから彼は聖杯に願う。

聖杯を手に入れれば、聖杯に願いが届けば魔術師とは何なのか、魔術師とはどうあるべきかが解る。

そう信じて疑わない。

衛宮士郎がこの場にいたなら、その身は既に魔術師だりつと諭しただろう。

魔術師が彼を見たなら、嘲笑うだらう。

間桐慎一は気がつかない。

その身は家族を失い、家族を追い出し、尚も魔術を追い求める狂氣に囚われているのだから。

「

彼が召喚したサーヴァントは確かに狂戦士だった。

それは聖杯戦争を侵す規則違反。

それは誰もが考えつかなかつた方法

少年の前に佇まつ姿は、ボロボロの黒い外套を鍛え上げられた両の肩に引っ掛けるように背に流し

漂う氣風はおおよそ少年が予想した人物とはかけ離れていたが、それも歴戦の兵を感じさせるものなら何を落胆する事があろつか。

そして何より田代は獅子の髑髏を被つたその姿は間違いなく最強にしてとある教団の最後の一人。

「や、……つ…た　　？はは、アハハハハハハハハハハハハハハハハ！……やつた！成功だ！！この僕が間桐慎二がお前のマスターだ。僕に勝利を、そして聖杯をこの手に差し出せ……！」

「暗殺者！――！」  
「バーサーカー！」

少年が呼び出したのは暗殺教団首領。本来アサシンのクラスで呼び出されるそれは、静かな狂気に満ちていた。

## 嘘/話（後書き）

狂化の属性を付加された暗殺者です。  
ステータスはこれから考える。

## サーヴァントステータス2（前書き）

オリジナル捏造設定全開です。

ステータスとスキルは宝具内容を存分に發揮できるように考えました。

もしかしなくとも、第4次の狂戦士並みの強敵。

呼び出したマスターが違つていれば、それは間違いなく主人公キャラ。

セイバー（4次）の様な願いで、切嗣や英霊エミヤの様な戦闘思考。

## サーヴァントステータス2

### 狂化暗殺者紹介

アサシンのクラスに呼ばれる筈の暗殺教団歴代首領、ハサン・サッバーの18代目。

暗殺教団最後の首領であり、侠気な性格であり狂気を孕んだ戦闘手法を幾度となく経験してきた。

百の貌のハサンから教主の座を継いだ人物。

彼だけは通常の暗殺者召喚では呼ぶことが出来ず、狂化の詠唱を挿むことでしか召喚されることはない。

聖杯に託す願いは、暗殺教団の再興であり、次の首領にさせることが出来なかつた少女のことを想い残していた為、彼女を次のハサンにすること。

そこに誇りはなく、目標殺害の為なら暗殺はもとより、敵に堂々と姿を晒し対面して戦うことも、どんな悪辣外道な手段をとることも厭わない、戦う姿は暗殺者よりも騎士に近い。

クラス：暗殺者  
マスター：間桐慎二

真名・ハサン・サツバーハ

ステータス：

筋力A 耐久B 敏捷A 魔力E - 幸運E 宝具C

： 気配遮断D - 狂化：C / 戰闘続行A 武器破壊B 無窮の武練A + +

氣配遮断D - では感のいい一般人でも姿をとらえることが可能。実質発動していないのと殆ど変わらないが、相手の死角に廻り込んでいる場合に限り補足されることはあるまい。

狂化Cではギリギリ理性を残している為通常の会話はかろうじて意思疎通ができる程度。

しかし、一度戦闘となれば籠が外れ文字通りの止まる「ことを知らない狂つた戦士となる。

武器破壊Bは戦闘の中でも相手の武器の最も破壊しやすい部分を的確に見抜き、ランクの低い武具なら致命的な攻撃を与え壊すことができる。

但し、一定の形をとどめない武器に対しても見抜くのは難しくなる。

宝具1：狂信宣告

対人宝具

「命」の定義を歪曲し、触れた者の「命」を他の物質へ与す。

「」の剣は我が命と同義」のよつた形を実現してしまつ」ことができ

る。

「命」は肉体と離れた殻のない中身が剥き出しのまま現れている為、僅かな衝撃でも加われば本体の「命」は傷つき、武器同士で撃ち合うようなまねをすればショック死しかねない。

物が壊れれば確実に絶命する。

写す対象はその場の近くに在る物なら何でもよい。

宝具2：？？？

対軍宝具

令呪を用いて狂化を一時的にでも解除すれば使用可能。

歴代ハサンの中で唯一の対軍宝具を持つ。

## サーヴァントステータス2（後書き）

紹介の中の『彼女』は本編の外伝作品『Fate/strange  
fake』のアサシンのことを言っています。  
ワカメがダークホースになりそう（笑）

回つキャスターを愛して止まない。否、病む。

「 つん……」

目を覚ましたのは、あれからどれくらいたつた後なのだろうか。

サーヴァントにも眠気はあるのかと、眠い目をこすりながら横たわつていた体を起こす。

氣だるい感覺と魔力不足が同時に襲いかかり、まるで低血圧の起き覚め貧血のような氣分だ。

少しずつ意識と思考が通常の回転に戻つていぐ。

そして、奇跡のような真実を認識する。

「……生きてる?」

この身はまだ座に還りず限界し続けていく。

助かった?

廃墟のビルから放り出され、暗い路地を魔力切れの体を引きずりながら歩き、力尽きて壁にもたれかかったところまでは覚えている。

それから何があつたと言つのか？

そつ思つたといひで、自分の中には、一つの感覚に気がつく。

とても温かく、優しい気持ちが

魔力なんか蛇口の周りに浮かぶ結露のような、水滴にもならない量しか流れきていないのにそつ思える。

見渡すとそこは薄汚れた裏路地ではなく、畳の日本屋敷の一室であることが聖杯の知識から知ることが出来た。

寝かされていたのは私の体には少し大きめの布団。

そこから何処となく男性の匂いがするのは、この家のの人間が普段使っている物だということが分かる。

着ている服も黒いローブから下でも用の紺色の浴衣に変わっている。  
そう言えばアヴェンジャーのローブの下に来ていた服を破かれてしまつたことを思い出す。

寝かせるこじる、そのままではなく着替えせられたといつ訳だ。

氣だるい感覚を我慢しながら立ち上がり、おぼつかない足取りで部屋を出る。

庭先が見える廊下に出て、自分と繋がっているラインを手繰り寄せる。

もう少し、すぐやい……

片手で胸の鼓動を抑えつけながら恐る恐る明かりがともる部屋の障子を小さく開けると、二人の男性が見えた。

「ですから、何か特別な事情を抱えた子みたいなんですよ。」

「ふむ、深い理由話をせない訳はおおよそ認めよ。特にこれ以上の騒動もないわけだな？」

「はい、あの子が目を覚ましたら事情を聞きますんで、明日先生にお伝えします。」

「そうか、なら私はもう帰る。くれぐれも間違いなどは犯すなよ。」

「大丈夫ですって、明日の朝になれば藤村先生も来ますし、後輩の子も朝食の手伝いで来ると思っています。」

「フム、藤村先生の監察下なら問題ないだろ。邪魔をしたな。」

そう言って屈強な体つきをした男性は帰つて行つた。

そして尚、ラインから繋がる感覚がこの家を示す答えはただ一つ。

あの少年が私を助けた、魔術師マスターということだ。

僅かながら強張る手に力を込め、意を決して少年のいる居間の障子をゆっくりと開ける。

「……あ、あの……」

何と声をかければいいのかとつさに思いつかず、おどおどした形になってしまったけど、私の姿に気が付き振り向いた彼の顔がとても幸せそうに緩み。

「ああ、気が付いたのか。もう立つて歩いて大丈夫なのかい？」

「ええ、……あなたが私の、マスター？」

そう聞きながら途端に恥ずかしさがこみ上げてきて、はたから見たら、もじもじとした締まりのない格好になってしまった。

「は？……マスターって何さ？」

「え？」

私と彼に同時に湧き上がる「？」

何やらいきなり話がかみ合わない雰囲気だ。

「えっと、あなた…魔術師よね?」

「ああ、半人前だけど魔術師だぞ? 危ない状態みたいだつたから何も考えずに君を助けたんだけど、一体何者なんだ?」

聖杯戦争を知らない?」の冬氣の地で?

「…………どうやらお互い躊躇あわないわね。…………お互い質問し合う形でいいかしら?」

「よく解らぬけどいいぞ?…………それじゃ、自己紹介から行こうか。俺は衛宮士郎、未熟ながら魔術師をやつてる。君の名前は?」

「今は、…………そうねキャスター(魔術師)と名乗つておきまじょうが、勿論偽名のようなものだけど今は本名を名乗ることは出来ないわ。あなた、聖杯戦争を知ってる?」

「聖杯…戦争? 聞いたこと無いぞ? それと君…キャスターちゃんは何か関係があるのか?」

「ちやんツー?…………ええ、私はその戦争で呼び出された使い魔、英靈よ。」

「使い魔つて…！？何処からどう見ても人間にしか見えないぞ？」

彼は驚きながら私を眺める、どうやら本当に聖杯戦争の事を知らないらしい。

「勿論、英靈ですもの。人の形をしていない奴がいるとしたら、それは悪靈か悪魔の類よ。私のターンね。英靈の意味くらい魔術師のはしぐれなら知っているでしょ？」

「ぐつ……過去に偉業を成した人や神話や、おどき話に出てくるような信仰や崇拜の対象となつた人物のことだろ？」

「そうよ、そして聖杯の力によつて現界したのがこの私。キャスターのクラスを『えられた英靈。』

ちょっと胸高々に振舞つてみる。そうよね、どうやらこの少年はこの地に居ながら聖杯戦争の事も知らない素人魔術師みたいだし、ここで上下関係をはつきりさせておかなくつちゃ。

「えつと、つまりキャスターちゃんは過去の人物で、歴史に残るような英靈つてことか？」

「そう、因みに私以外にも、この冬木の地には英靈が召喚される筈よ。7人の魔術師が7体のサーヴァント、つまり英靈を使い魔として使役し聖杯を奪い合う戦い。それが聖杯戦争なんだから。」

「なつー！？ちよつと待つてくれ、冬木に俺以外の魔術師がいるって言つのか！？」

「…………あなた、本当に魔術師なの？魔術師の気配がそこまで濃いものだとは一概に言えないけど、まるで今まで魔術師なんて見たことがないって顔よ？」

「…………」

「え…………？」

物凄く気まずい空気が流れる。

魔術師に遭つたことがない魔術師なんているのだろうか？

「もしかして、極度の引き籠り？」

「断じて違う！俺は毎日学校にも通つてゐるしバイトもしてる！休日はボランティアにも出向いて地域交流の場にも積極的に参加してるんだ！そりゃあ、魔術師との交流なんてなかつたけど、けしてひきこもりじゃないぞ？」

「…………」

「何だよ？今度はそつちが黙つちやつて

呆れてものが言えない。

ここに、HIMIヤシロウという人物は魔術師と呼ぶべき人物じゃない。

学校に通つてバイトにボランティア?上二つは構わないにしろ、ボランティアですって?

魔術師がそんな等価交換をぶち壊す所業に何の抵抗感も抱かないなんて正気じゃない。

「はあつ、これはとんでもない外れ籠に助けられた見たいね……いいわ、マスターを矯正するのもサーヴァントの役目だと思って諦めるわよ……」

「だから、何だよ『マスター』って?俺はそんなのになつた覚えはないぞ?」

「…………ほんと、これじゃ勝ち残れないわ。…………いいこと?」

「今夜は私が説明することを理解するまで寝かさないから。」

どうも私の前途は多難を通り越し万難らしい。

\*

\*

時は少しだけ遡り。

吉峰綺礼は協会の一室で靈氣盤を眺めていた。

「ふむ、今回の聖杯戦争はどいつもクラスマス外の英靈が呼ばれたようだな、召喚したのは 凜か。」

召喚された時間から推測するこそが得られるのが妥当だ。

どいつも最後まで自分の忠告をつづかり忘れていたようだ。

彼女の魔力が最高に高まる時間と召喚時間が少しづれている為、大方『また』やらかしたのだろう。

まあ、呼び出したのならそれはそれで構わない。

早速だが、そう急に彼女に助力を求めるなればならない厄介事も舞い込んできたことだ。

ここはひとつセカンドオーナーとしての仕事ぶりを観るとともに、呼び出したサーヴァントについても遠くからだが見させてもらひうとしよう。

そう考えながら夜は耽つていく。

『続いてのニュースです、冬木市を中心に起つて いる女性連続誘拐事件ですが』

浴衣は子ども時代の土郎のものです。

キャスターに襲撃をかけた凛達の行動理由はとりあえず必要かと思い、シンプソンに出張つてもらいました。

そして、自分で押さえ目に書いておきながらキャスターのセリフがR指定な意味で『今夜は寝かせないわよ』とデフォルトで誘惑調に脳内変換されている私の脳内電波。

浴衣姿のキャスターに言われたらイチコロです（笑）  
この気持ちまさしく愛だ ハアハア……

## 嘘の話（前書き）

「まけた」とはいいんだよ！

今回の内容を表す魔法の域に達した一言（笑）

結局、衛宮士郎が聖杯戦争の事情を呑み込み自分の置かれた状況を、その底抜けの馬鹿な頭……決して勉学の能力が低いわけではないが、魔術師が絡む裏の世界の何たるやを詰め込むことが出来たのは時計の針がくるくる回つて午前3時30分を過ぎたころだった。

最後の方の話は明日から的一緒に暮らすにあたつての段取りなどだつたが、その頃になると流石にサーヴァントと契約したばかりで、普段から魔力の放出に慣れていなかつた士郎はそのまま居間で潰れるように眠つてしまつた。

キヤスターは士郎の魔術回路の起動スイッチに關してあれこれと言及したが、それも明日になつてからといふことで、これ以上余計な魔力を消費しない為に靈体化する運びとなつた。

キヤスターにとつて幸いだつたのが、士郎の魔術工房としている土蔵に魔力の回復を促進する魔法陣が張つてあつたことだつた。

どう考へても士郎が張つたものではないということは知れたが、彼の養父である故人、衛宮切嗣が描いたものなのだろうとキヤスターは判断し、その上で静かに祈るような姿勢で膝をつき、短い眠りに就くことになつた。

一見してのんびりとしたやり取りだつたが、その実キヤスターは心の中に焦りがあつた。

このままじゃ明日にでも自分たちは脱落する。

アヴァンジャーのマスターは何故自分たちを襲ってきたのだろうか。

その答えは明確にして、不可解。矛盾をはらんでいるが故の推理材料となる貴重な情報源だ。

第一に、元マスターはどうも無い肩ではあつたけど、こと自分の根城に対する隠匿の魔術結界に関しては私が作成していたのだ。陣地作成スキルA+を舐めてもらつては困る。

余程『場』の変化に敏感な者でなければ見つけることなんてできない筈だった。

つまり、アヴァンジャーかもしくはマスターには結界などを探知できるスキルがあると考へるべきだ。

そして、元マスターが愚痴るように零していた言葉　　冬木の地における靈脈を協会から委託され管理するセカンドオーナー・遠坂。

成程、あの若いマスターは今代の遠坂当主と見ていいだろ。

私たちに襲撃目標を定めたのも、誘拐などに手を染め町を齧かしていたのだから納得がいく。

だけど、今となつてはあの忌まわしい命呪の命令で命拾いしたともいえる。

あの行いで魔力を十分に蓄えていたからこそ、マスターを失つてもなお数刻の現界が可能だったのだ。

魔力を莫大に消費する私では本来あそこまで長くは持たなかつただろつ。

現在私がいる新しいマスターの屋敷を軽く解析したけど、迎撃などをを行う複雑な結界は一切設置されてなく、悪意を持った侵入者への警報装置のみだった。

こんな簡素な、逆に見つけづらいくらいのしょぼい結界なら、キャスターのサーヴァントがいる屋敷だとは思わないかもしない。

勿論私自身の魔力を察しされることを防ぐ為に魔力隠匿の道具を作る必要があるけれど。

これなら、暫くは回復に努めることができる。だけど……

キャスターは一刻も早く、そして僅かでも多くの魔力を欲していた。

新しいマスターに体を求めるよつなマネも考えてはみたものの、如何せん今の自分は何処からどう見ても幼すぎる。

もしこれに応じるどころか、いきり立つモノがあるようなら思わずナニを蹴り潰してしまうかも知れない。

まあ、あの見るからにお人よしな腑抜けがそんなことを良しとするわけがないか。

と、衛富士郎に対し名譽なのだか不名譽なのだかわからない評価を付け静かに眠りに就いた。

衛宮士郎の朝は本来なら早い。

田の出前に田を覚まし、朝の軽いトレーニングの後に朝食の準備を始め、さながら通い妻のような後輩がやつてくると一緒になつて台所に立つ。

近所の古くから姉のように慕う担任教師が朝食の時間に現れ、やれ賑やかな疑似家族模様を醸すのが日常となつて、弁当を包むと後輩が頬を染めながら一足先に部活動の朝練習のため学校へと向かい、そんな様を笑顔で見送りながら自身も登校の身支度を始める。

そんな古風なホームドラマのよつな一描写が衛宮士郎[モ]の筈だった。

しかし、本日に至つてはどうだうか？

「私、わたくし衛宮切嗣の娘、メイと申します。不束者ですが、宜しくお願

い致します。」

後輩間桐桜と担任藤村大河の田の前には、異国の美少女が正座に三つ指を立てて深々とお辞儀をしている。

更に士郎が付け加える形で、衛宮切嗣の「隠し子」だと付け加える。

呆然とする一人の女性を横に士郎は故人切嗣に心の中で懺悔する。

『許してくれ親父！－！許してくれ！－！－！』

最早、ホームドラマから画ドラが「ゴールデン」の「流ドラマ」と化していた。

何というエロロゲだろうか。

「き、い…………り、…つ、…………んの…………かか、隠し…子

？？？」

義姉、藤村大河は卒倒寸前まで思考回路が寸断されメチャクチャな状態である。起源弾など無くとも人はこつも簡単にかき乱れるものなのだ。

「メイ、…………ちゃん？」

間桐桜は何か突然の事態についていけず、只々思考の渦にのまれているだけのように見える。

「私は今まで母と二人で暮らしていたのですが、先日……母が病で帰らぬ人となってしまい…………母の最期の言葉に衛宮切嗣という男性が私の父という言葉を聞き、彼を頼る為に日本に参りました。」

流石は裏切りの魔女、例え不名誉な呼び名としても役者が板についている。

僅かに瞳を潤ませ幼い容姿とか弱い雰囲気、折り目正しい気品を醸し出せば、藤村大河（単純な一般人）などイチコロだった。

「切嗣さま ああああああん！－！」

とうとう泣きだした藤村大河は思い余つて大粒の涙を噴水のようこまき散らし、キャスターを抱きしめる。

「えっと、先輩……」れは……」

「すまない桜、俺も昨日突然キ…メイちゃんと出会つてな。ああ、DNA検査の用紙も見せてもらつたし、あの子が爺さんの子どもだつて言つのは……そりやう。」

殆ど嘘である。

念のため其れっぽい用紙を昨晩、急げしりんでキャスターが作り、それを見たと言つだけだ。

昨日会つた

用紙を見た

やつらしき

せつひ、嘘なんていわれつぱつも言つて無い。

とんだ詭弁である。

「とにかく、一通り落ち着くまでメイちゃんを家に置きたいと思つてゐるんだ。本当なら遺産分配だつて出来た筈なのに、親父の事何も知らなかつたつていいうし。血は繋がつてないけど、本当なら俺たち家族なんだからさ。」

「ぐずつ……むつ、でも大丈夫なの士郎？めこちゃんなんに可愛いのに、野獣な士郎と夜を共にして、美少女に手を出したらお姉ちゃんは許さないわよ？」

「ばつ……出るわけないだろー？藤姉えが許す許さないの前に犯罪だろそれー？」

「はー、お兄ちゃんに優しくして頂きましたし、心配ござません。」

キヤスターも余裕が出てきたのか勝手にキヤラを演じる始末

「先輩……先輩つてまさか……口……」「違つ……断じて違つ……」

そうだ、そんな筈はない。

HIIヤシロウは年端もいかぬ少女の体に欲情することなど、まして

や擬似的な近親愛などといふ背徳に心動くような人物ではないはず。

\*  
\*

「……………そうだ、断じて違う。」

アーチャーは衛富士郎宅から200メートル以上離れた電柱の上から、靈体の姿で件のやり取りを観察していた。

そうだ、それは違う。衛宮士郎（俺）は少女の味方では無い。正義の味方にならうとした愚か者だ。

断じてロツコーンでは無い。そう心の中で叫ぶ。

「しかし、様子から見るにキャスターか……これと言つて奴が傀儡になつていてるようにも見えん。まさか、アイツがキャスターを呼び出したのか？」

自分の摩耗しきつた記憶の中の聖杯戦争と今回のこれは大きく食い違つ。

それが当たり前のことなのかどうかはアーチャーに判断しかねるところだつたが、重要なのは「アレ」が未来において正義の味方になる衛宮士郎なのかどうなのかだ。

その一寸の判断でこの聖杯戦争の行く末が大きく変わる。

そうアーチャーは確信していた。

例えこの世全てを敵に回しても

そう考えていたアーチャーを遠く離れた別の電柱から見ているサー  
ヴァントの存在に彼はまだ気が付いていなかった。

「ギャハッ！－！みーつけた  
ラグラグラガガラギヤハヒヤアハ－－－！」  
ゲクキヤハッ！ゲラグラゲ

よう兄弟、楽しんでるかい？

「お兄ちゃん」ただその一言を闻かせたくて無茶なやり取りをさせたこの回。

別に姿隠したままでよかつたんじゃね?と黙つたそのあなた、ニ

〇!

隠し子＆養子の同棲恋愛伝奇アクションADLVなんて胸が熱くなる

だろ?!

それがロビキヤスターならなおさらだ!-

……正直、思いつきませんでした。

## 嘘10話 アーチャーファン注意（前書き）

本話におけるアーチャーは原作のよつに格好良くあつません。  
格好いいアーチャーでなければ、それはアーチャーでは無いと思つ  
方はご注意ください。

いいか、絶対に叩くなよ、絶対だ！！

心は硝子（顕微鏡のプレート）レベルの強度です。

## 嘘10話 アーチャーファン注意

「はあ、…ハアっ、ゼッ

トレートレー・スオノ  
投影開始ーー！」

アーチャーは逃げる。

なぜ俺が逃げている？

この身は生涯にわたり、ただ一度の敗走もなき英靈だぞ。

別に英雄などともではやされる為に行つてきたわけではないが、それでも退くことのない、揺らぐことのない信念を持って突き進んできた英靈だ。

それが何故…逃げの為に全力を振り絞っている？

決して負ける要素があるからではない。

むしろ勝てる要素が幾重にも見受けられるくらいだ。

ならばなぜ逃げる？

「」が見晴らしの良い住宅街の密集地だからか？

今が聖杯戦争を行つには不向きな毎間だからか？

違つ、そんなことでこちこち逃げるようなマネはしない。

戦えんのであれば、それなりに相手の戦力や情報を掴み取る為にギリギリの綱渡りをやって見せるのが英靈エミヤな筈だ。

無様に、醜く、だらしなく、みつともなく、型も忘れ、道も忘れ、腰も入れず、只狩られる哀れな姿で疾走とも呼べぬ愚鈍な蛇行で逃げている？

なぜ逃げる？

怖い？いいや違う、例え恐怖が目の前にあつたとしてもそれすら凍りつかせ鋼の意思で立ち向かうのが英靈エミヤだろう。

なぜ逃げる？

戦略的撤退ですらない、こんな一方的な戦闘放棄なんて初めてだ。

なぜ逃げる？

五月蠅い！ならば、

「ゲヒヤハハ！…おいおい兄弟、何処に行くってんだ？ヒヤヒヤッ！…』まるで、ドッペルした後で自分のこと鏡で見た後みたいじゃねえか。』大丈夫だつてよ、その通りにしてやるから、さあ！…！」

なぜ逃げる？

見ればわかるだろう、

「アイツは一体何なんだ！…！」

見てはいけない、あれば、そんなんじゃない。

そんなモノを俺は望んじやいない。

冗談じやない。そんな訳がない。

俺は、俺は、俺は

「奇遇だねえ、俺も『ヒリヤシロウ』ってんだ。ハハハ...」

「ふざけるな、フザケルナ！...違う、違う違う違う違う違う

俺は理想に裏切られ。自分で望んで、自分を踏み台にして、自分を  
蔑にして、自分で冒し、自分で償い、自分で

何で逃げているんだ？

解らない、判らない、分からぬ

何で逃げているんだ俺は！？

どうじてだ、意味が解らない、訳が分からぬ。

俺は正義の味方ヒヨウジヤウで、

それで

アイツは何だ？

アイツは向むかの衛富士郎エイフジ郎だと言いつただ？

世界せかいと契約けいがくした衛富士郎エイフジ郎なら間違まちがいなくそれは俺オレ（ヤリハリ）な  
筈はずだ。

そうでなくではおかしい。

矛盾ぶつする、破綻はげんする、崩壊くずする、まるで今まで積み上げてきたもの  
が砂上さじょうのごとく崩れしていく。

もつたくせんだい

だから、

だから

「なーんだよ。オレ（お前）。んなじかたじと呼ひしゆじだつ殺す  
やつ。」

後ろから伸びて、全ての悪意を詰め込んだかのような悪意。

あああああああーーーー思い出した

忘れるわけがない。

これは地獄に落ちても忘れない、忘れるわけがない、忘れてはいけない。

『衛宮士郎』が『生まれた』その時の情景がフラッシュバックする。

黒い太陽、燃え盛る街並み、死せる地獄の光景

この世全ての悪

アンリ・マコ

なんで、何で、ナンデ！ーーーー？

「何で俺がアレなんだ！！」

「何でアイツ（俺）がアレなんだ！！

「違うだろ、違うだろ、違うだろ！！

「あの出来事があったから、俺は誰かを救おうと

「「「そうだ、だから俺は救つたさ」」

「900を救つて100を切り捨てた」「100を殺したら900が報われた」

「「」の身は「誰か（他者）の為になる」となんぞ飽きるほど犯つた」

「それが」「破綻してることなんぞ百も承知だつた

「死せる運命にあつた」「100人に裏切られた」

「味方した」「奴なんて、そもそもいたのかよ?」

「世界と」「無理矢理契約させられ、用が済むなり拷問処刑だ、いや、呪術で名前も剥ぎ取られた」

「知ら」「ねえ訳ないだろ? 何せ俺も」

「違」「わねえよ、俺は」「俺が」

「H//ヤシロウなんだから」

べらり、とバランスが崩れてとつとつその場に膝をついてしまう。

ダメだ。英靈H//ヤシロウに勝利する」とは出来ない。

否、殺すことは出来ても、そんな事をしてみる。

その時こそ英靈HIMIYAは世界を敵に回した大罪人として守護者より救いのない檻に囚われる。

やはり殺すしかないのか？

それが桜<sup>マスター</sup>を悲しませる結末になろうとも、己が欲望を、願望を、悲願を達する為に

衛富士郎をこの手で葬り去ることしかできないと呟つのか。

「なあオレ（お前）、テメーの望みは何なんだ？俺は

」

擦り切れた記憶の中で誰かがささやく

『喜べ少年、君の願いは

』

「恒久的世界平和なんだけどよ?」

邪悪な笑みでアイツ（俺）は言い放つた。

## 嘘10話 アーチャーファン注意（後書き）

書いておいて何ですが、私もアーチャーファンです。だからこそこんなアーチャーを書いてみたかった。あれ？ファンならこんな酷い姿書かないって？カッコいいアーチャーを虐めるとゾクゾクしちゃうくらい大好きです。

嘘です、ごめんなさい。でも書きたかったので。

## 嘘1-1話（前書き）

誰が主人公なのか解らない。ひょっとしたら、居ないのかも。

それは見るも無残な只一人の身の地獄

「待つてくれ、俺じゃない！」

民衆は男の叫びを聞き入れようとしない。

『お前のせいだ、お前さえいなければこんな結果にならなかつた。』

「違う…違うんだ、そんなこと俺はしちゃいない…」

そう、彼は悪行など行つたことは只の一度もない。

罪、罪、罪、罪、罪

おおよそ人の手による罪全てを男は被せられる。

『その罪人に指は不要』

足も含めその全ての指を失う男。

最後の親指を削いたのは何処かで見た親しかった箸のタレか。

『世を見る眼は一つで事足りる』

方目を失つても男は死ぬことを許されない。

その舌は不要

舌を抜かれ最早弁明も弁解も許されない。

『讀書二二二』

体を縛りつけられまた一つ、また一つと罪状が体に彫り込まれていく。

顔に胴に、背に、腕に、足に、魂に。

『お前みたいなやつのことを見つんだよ、アンソ・マコヒー』

そんな訳ない。

こいつはいつだって他人を救うことだけを考えて何の恩賞も何の感謝も何の褒賞も、一切を受け取らず、人助け自体が報酬として生きてきたんだ。

なのに『この世全ての悪』なんて呼ばれていいはずがない。そう、言つなれば差し詰め『正義の味方』だろう。

あれ、……じゃあ、アイツの『本気』って何なんだろう？

場面は変わつて何処かの災害地。

最早絶望的なまでの地獄の業火は、彼を貶めていた人々を容赦なく焼き殺そうとしている。

これは覆すことなどできない運命、死せる運命が確定づけられた絶対の事実。

正義の味方でもいれば、英雄でもいればそんな運命を打ち破る奇跡でも起こすことができただろうが、そんな人物は居ない。

居たとしても、彼らはそんな人物を陥れ、騙し、欺き、偽り、罪なき正義に悪を着せてしまつたんだ。助かる道理など何もない。

死せる運命の100人をが彼を引きずりだす。

『世界よ』

（ヤメ口）――――

指を削がれ、舌を抜かれ、方目を抉られ、罪状を彫られた男が、叫びにならない叫びを上げる。

契約しよう

契約しよう

「ヤメテくれー！ーーーーー！」

『此の者の死後を預ける。その報酬をここに、我らが貰い受けたい。

彼らは助かつた。罪人の死後を世界に売り渡し、奇跡を犯した。

彼の死後は守護者として縛られ、抜け出すことのできない永遠の牢獄へと囚われてしまった。

なのに、その果てに遭つたものが、剣の丘の処刑場。

「体は剣で出来ている

ただの一度も罪はなく……ただの一度も正義は無し。

不滅の剣で満ちていた「

「 最悪の朝だわ……」

アイツの過去なんて見るんじゃなかつた。元から見る氣なんてなかつたわけだけれど。

サーヴァントとマスターは契約で魔力供給ラインが繋がつていてる。

その関係でサーヴァントの過去を夢の中で見てしまつことがあると

言つのは聞いたことはあつたけど……納得。

綺麗がどつしてそんなことを教えてくれたのか僅かに疑問だつたけど  
やつてくれるじゃないの。

正義の味方はバットエンドで幕を閉じました……

最悪じやない、そんな結末があつていいはずないのに。

努力して努力して、成果を上げたものが報われないなんて在つちや  
いけない。

そいつは、その功績に見合つ位幸せにならなきやいけないのに、受けた仕打ちはよりによつてこの世全ての罪状による処刑とは……

「だから、アンリ・マコ（この世全ての悪）か……」

今のアッシュからは想像もできない善人ぶりじやないの。あんなに笑つて、はしゃいで、邪悪で

でも、確かにあんな風に裏切られ迫害されたら人間壊れてしまうだろつ。

あそこまで一ソングに『悪であれ』とされたら、本当に邪神だつて作れてしまうだろう。

そんな奴だ、だからこそ人間をあそこまで躊躇なく殺せるのも頷ける。

むしろ復讐心を抱かない方がどうかしている。

だから復讐者なのだろうか？

「アヴェンジャー、居る？」

アヴェンジャー

返事がない。只の  
つて！？

.....

「アヴェンジャー！？」

居ない? まさかアイツ、勝手に家を離れて何処かに出かけたというのか。

拙い。アイツ基本スペックが低いくせにやけに交戦を好む自殺志願者宜しくな奴だから、きっとサーヴァントを探しに行つたに違ひない。

時刻は丁度7時、何だか嫌な予感がする。

昨日の晩に昼間の交戦は余程人気のない場所以外は御法度だと教え込んでいたが、それが反つて裏目に出たか。

あの馬鹿は小学生並みの感性しか持っていない、押すなと言われたボタンは是が非でも押してしまつ夜となのか？

なんにせよ今からでも遅くない、否、手遅れかもしれないが一先ず  
あいつを私の下へと呼び戻さなければならない。

『アヴォンジヤー……あんた今ビリーニュわけ?』

そう、令呪と契約で繋がった魔術ラインを通して怒鳴りつけてみると。

そうだよそだよ！！！それでこそ俺だ！！ぶち殺してみろよこの俺を！ヒヒヒ、投影開始イイイ（トレースオオオオ）！！.』

最ツ高にハイな状態で戦っているらしい

『アヴォンジャー！！！.』

『あ、あ？んだよ、ひんぬー。人の楽しみ邪魔すんじゃねーよ、露  
出放置プレイさせつぞ？』

とある日常系の裏側でした。

## 嘘1-2話（前書き）

水月の雪さん を5回ほど廻っていたら少々遅くなりました。  
マヨイガから抜け出す気が失せるほど叫んでました、「雪さんは俺  
の嫁え！」と。  
ふう…。もーぺんマヨイガ逝ります。

「ねえセイバー？あなたは聖杯に何を望むの？」

白い少女は無邪気に笑う。

「私が聖杯に託す願いは王の選定を選び直すことです。」

「ふうん。」

私との会話を楽しんでいるのだから、分からぬがマスターであるイリヤスフイールはいつも他愛のない話を振ってくる。

「前は違う願いだったのに、何で？」

そして何時も私を糾弾する笑みの田で追い詰める。

「それ……は……」

果たしてこれ以上を口にしていいのだろうか。

「くすくす、何か隠し事かなあセイバー？」

首を傾げ私を見上げるように覗きこんでくるイリヤスフィール。

本当に私で良かったのだろうか？

経緯はどうあれ、私はアインツベルンにとつて目の前にあった最上の悲願をこの手で破壊した咎人だ。

なのに、何故またしてもこの私を呼び出す気になつたのだろうか？

「ねえセイバー？ 私ね、すつごく殺したい人がいるの。」

ドクン、とひとときは高く胸を打ちつける心の鼓動。

それは私ですか？

聞くことが怖い。

アイリスファイールを護りきることが出来なかつた。

彼女の母を死に至らしめてしまつた。

私のせいで、

聖杯を掴むことが出来なかつた。

そう言いたいのだろうか？

召喚されてすぐにイリヤスファイールから聞いた。

衛宮切嗣は5年前に死んだ。

何でも聖杯戦争の後に戦いの後遺症か、魔術師としても人としても衰弱し息を引き取つたと聞かされた。

ならば裏切り者と定めるのは残るはこの私だ。

彼女たちの目的、失われた魔法を取り戻すことだけに1千年を費やす妄執は死者（英靈）すら憎悪の対象としているのだろうか。

「 それは……？」

口の中がからからと渴く感覚に襲われ、上手く言葉を紡ぐことができない。

彼女の赤い瞳がとても口ワク。

ああ、ヤメてくれ。ソンナウレシソウナメデワタシヲミナナイデクレ。

イリヤスフィールが自然にわたしの田の前まで近寄ってきて、その距離は既に鼻先がぶつかる寸前まで来ている。

力チカチと上手くかみ合わない歯が堪らなく鬱陶しい。

腕にも足にも、心にも力が入らない。

「あ…………わ…………しは…………」

「ふふ、怖がらなくとも大丈夫よ。  
衛宮、殺して欲しいのはお兄ちゃんよ。」

「 ハハ……ヤ?？」

衛宮、殺して欲しいの

衛宮 ?

衛宮

衛宮

途端、それまでの恐怖が一転して憎悪の感情が津波のよろづに押し寄せ  
る。

衛宮

そうだ、彼のせいだ。

衛宮！

あの男がわたしの最後の希望をぶち壊した。

衛宮！――！

あの男のせいだ！――！

「衛宮！――！」

溜まらずここに居ない人物に怒鳴りつけてしまつ。

「せうよセイバー。裏切り者は皆みんなみーんな殺さなくつちやね。

」

雪の少女は無邪気に私の前で踊るよつて両手を広げて廻る。

「その為に私はあなたを呼んだのよ、セイバー。」

「解りました、相手が衛宮を名乗るのなら私もこいつの容赦はしません。」

そうだ、前回の戦いは私にも問題があった。

なにが高潔な騎士王だ。

誓れる戦いだ。

なにが英靈だ。

私の目的はなんだ？

私の犯した罪を思い出せ。

ランスロットとの最後の戦いのとき、私に何の誓れがあったという

のか。

完璧な王を貰いた果てにあつたのが臣下の憎悪なり、完璧でなくていい。

誉れに拘り悲劇を見るなら、これもいらない。只々その身を剣とし心を無機質に貶そつではないか。

『騎士に世界は救えない。』

救えないなら騎士である必要は何処にもない。此の身はブリテンに捧げる救国の隸属。

ならば高潔も完璧も崇高も誉も名譽も名聲も品格も氣高さも誇りも栄華も正道も王道も 一切吟財必要ない。

あの魔術師殺しをして田前まで至ることが出来たのだ。

騎士道を貫くとしたが故にあんな無様を晒したんだ。

ならば、これより私が歩む道は

「例え」の世全ての悪を担おうとも 構いません。それで聖杯を手にあむことができるのなら、私は喜んで引き受けます。」

聖杯戦争を勝ち抜くのに嘗て聞いたこの言葉を放つことはある意味必然だつたのだろう。

そこまでしなければ勝ち残れない。

そこまでもなお足りない。

万策を用いて敵を最短で、最速で追いやつて初めて勝機を見出すことができる」の戦い。

他の英靈とは違ひ前回の聖杯戦争に参加し、その記録を残してしまつてゐるが、慎重に動いていけば何とかなる筈だ。

御三家のうちの残る一家にももしかしたら前回の私の顔を知る者が参加するかもしない。

そうなつたときには真っ先に殲滅する対象は間桐、遠坂、

そして衛宮だ。

真名がばれているのならそれでもよし、その時は存分に以前とは違う私を見せつけ翻弄をせぬまで。

幸いにも今度のマスターであるイリヤスフィールは切嗣など比べようもない程に膨大な魔力を持つた守り手だ。

聖剣の真名解放も五回は行えると見ていいだろう。

「やる気は十分ね、セイバー。じゃあ、早速挨拶に行きましょう。まずはお兄ちゃんが怯え慄き命じいするまで追い詰めましょう。」

「いきなりですね。衛宮を名乗る以上油断は禁物ですが、復讐のあいさつはトドメを刺すときになってしまいますよ？」

「構わないわ。許す気も勝たせる気も負ける気だって、これっぽちもないもの。さあ、行きましょう。こんどこそ私たちの願いを叶えるために。」

## 嘘1-2話（後書き）

前書きがお粗末すぎたので。

お分かりの通りセイバーさんではなくzero基準で行きます。

zeroのセイバーさんが立ち直れないままにイリヤ必殺『飴と鞭』を食らつたら恐らくこうなるのでは？？と思いつつ、まんまと心理誘導させられた回でした。

騎士道を捨てた騎士王。

そこに華は無く、積み上げた屍の山で奇跡の杯に血濡れの手を延ばす。

プリーズ、ジャッジ。アウト？セーフ？  
ギリギリの表現を目指していたらまたもや遅くなつた。  
+飲み会で急性アル中になり病院に担ぎ込まれたのさーーー。  
本当にマヨイガ逝つちまつところでした。  
＼お巡りさん私です／  
土郎君を悟り開眼させました（笑）

「それじゃあお兄ちゃん。」の魔法陣の上に乗つてちょうどだい。」

キャスターちゃんの言つとおりに土蔵の中の一 角に描かれた魔法陣の上に乗り魔術回路のスイッチを作るために瞑想を始める。

「ううでいいのか?」

腰をおろし座禅を組む姿勢になりキャスターちゃんと向かい合つ形になつているこの状況。

密室で形だけとはい『お兄ちゃん』と呼んでくれる義妹的な存在と至近距離でいる状況は後輩の桜と一緒にいるときよりも落ちつかない。

簡潔に表現するなら一人の少女を意識してしまつてはいるところだ。

「やつ、それでいいわ。次に魔術回路のスイッチをいつも通りの工程で組み上げて。それを基盤に固定するから、何時もより慎重に、お兄ちゃんがより完璧だと思つ出来栄えのものにしてちょうだい。」

「うへ、簡単に言つてくれるな……」

キヤスターちゃんの教育はスバルタに感じるけど、こんなのは魔術師が、魔術師としての人生において一番初めに行つべき事柄だと言うんだ。

つまり、今までの俺は魔術師ですらなかつたという訳だ。

だったら、今からでも遅くない、衛宮士郎は魔術師にならねばならない。

黙々と頭の中でトリガーワードの先にある、手の届きやうで届かない、誰も知らない秘密の位置に手を伸ばす。

体がギリギリと引き伸ばされるような、引き千切られそうな錯覚。

背中から液体窒素を流し込まれたかのような感覚。

「来たわね。」

ガチリ、ガチリと歯車が咬み合つよに起動スイッチが組みあがつていく。

と、

キヤスターちゃんがオレが座つている魔法陣の中に入つてきて顔を近づけてくる。

「落ちついて、緊張しなくても大丈夫。」

大丈夫な訳ない。

一定のリズムで脈動していた心臓の鼓動が一気に跳ね上がる。

ダメだ、落ちつけ、意識が乱れれば起動スイッチは不完全なものとなってしまう。

沈まれ、沈まれ！！

「……っん」

キャスターちゃんがロープを脱いで紫のワンピース一枚の状態になる。

か細い腕、白く艶やか肌、幼いながらも膨らみは主張をするふくよかな胸、折れそうな腰。

「こぐわよ……」

キャスターちゃんが俺の首の後ろに手を廻し絡めてくる。

「キャスター、ちゃん」

少女の匂いが、迫つてくる。

汗臭い俺なんかとは違う、幼く、可憐で、甘く、誘惑的で、妖艶で、その全てに存在を奪われるような錯覚に陥りそつだ。

「んんっ……」

彼女と二度目のキスは、今度は俺のために。

キャスターちゃんの唇と俺の唇が強く重なり合つ。

見れば彼女も相当恥ずかしかつたのか、顔を真っ赤に染め上げていた。

考えて見れば当然じゃないか。

出会つてからまだ10数時間程度しか経つていない男と濃い色沙汰でもない状況でキスなんてしているんだ。

普通の女の子でも嫌がるだらうじ増してサーヴァントとはいえこんな幼い少女が何の感情もない筈がないじゃないか。

なのに、未だ背徳感が劣情の波と共に押し寄せている俺のはいきり立つたままだ。

それがどれだけの背徳か知るが故の感慨。

花も恥じらうといふ言葉があるならそれを摘み取り己が剣山のをしものにして一輪を散らすが如く。

衝動に駆られる。

衝撃が迫る。

最早猩々か猿まじゆにでも落ちてしまいたい欲求。

目も前の少女を小

「ぐ あがああつ！――！」

「――」

体中の、隅々が針か何かでこじ開けれれる様な感覚に襲われる。

ナニガ起こつてる――？

落ちつけ、呼吸を乱すな。

視界が判別できないほどに点滅を繰り返す。

白から赤へ、そして暗転、

途端に全身を内から焦がすような痺れが襲う。

「そ、呼吸を整えて！氣を抜かないで、丹田に力を込めて。普段使用していた固魔術回路の固定化と同時に、あなたの普段使われていなかつた回路が起動し始めたみたい。」

普段使われていなかつた回路？

普段は脊髄の一本を通して襲いかかる悪寒や熱氣が今は全身を駆け巡つてゐるのはその為か。

「……一体、なん……」

何本あるんだ？俺の魔術回路は？

「待つて、……27本よ。……一代の資質にしたら破格の総数だわ。」

それがすごいことなのかどうなのかは自分ではわからない所だつたけど、キャスターちゃんがそう評価するなら凄いことなのだつ。

勿論一代に限つての話だらうナ。

「ぐ……」の痛みと痺れは一体いつまで続くんだ…？」

「あわてないで、自分のイメージする起動スイッチを思い浮かべて、

ゆつくつ、ゆつくつ。 「

そう言いながら尚もキャスターちゃんは俺を正面から抱きしめ、まるで飯事で我が子をあやす母役のように優しく頭を撫でてくれる。

丁度俺の顔にキャスターちゃんの胸が当たる位置にあり、幼いながらも確かに膨らみは人の体の心地よさにおける史上にして至宝とも感じる張りと柔らかさを一枚の布越しに主張し、僅かに感触の違う頂点に鼻先が触れる興奮に最早ツナギのホックが壊れてしまうのではないかと心配しなければならないレベルだ。

このままじや彼女を、彼女のことを襲つてしまつ。

何の冗談だ衛富士郎。

俺はいつからそんな少女に欲情し、恋愛対象としてみるよつになつたと言つんだ。

か弱く、可憐な少女こそ衛富士郎が命を賭して守り抜きたい人々の一つなんぢやないか。

俺は美少女の笑顔が見れればそれで満足なんだ。そこに喜びはあれど悦びが在つちゃ

「想像開始」  
「イメージストア」

心頭滅却心頭滅却色即是空色即是空空即是色色即是空色即是空空即是色空即是色煩惱退散煩惱退散煩惱即菩提煩惱即菩提煩惱即菩提！  
！……！

頭の中をただひたすら虚無にして、洗い流すが如く清めの言葉を氾濫わせる。

まずはトリガーを構築しろ 起動トリガーは……擊鉄のように強固な鉄鐘が落ちるようにガキリ、でもゴギリ、でもなくガリチと歯車がかみ合つようだ

体の中を駆け巡る魔力、さながら血管の中をサーチットレースが行われているみたいでガリガリ五月蠅い。

「ふう、一先ず午前中は体を休めていてちょうだい。……うん、ちやんとバスも開いたし、やつぱり供給魔力は少ないけど、さつきよりは大分楽になつたわ。これなら簡単な魔道具と工房を作成するくらいは可能だわ。」

「わっ、…か。っう！」

「安静にして、お兄ちゃん」

そつとつて視界のおぼつかない俺の体をキャスターちゃんは静かに横に倒し、一緒に座りながら俺の頭をその膝に乗せてきた。

所謂膝枕という奴だ。

：勘弁してくれ、休めそうにない。

嘘1-3話（後書き）

セウト！！！

雪さんを嫁にしてキャスターを娘にしよう。

嘘1-4話（前書き）

日常パートつてむずいね。  
後半は決して病んできません。  
むしろ恋する乙女はこれがデフォルトだらう。

「よう遠坂、遅刻ギリギリなんて珍しいじゃん。」

遠坂たるもの常に優雅であれ。

「めんなさいお父様。聖杯戦勝序盤で早くも余裕がありません。

そして美綴り、あんたはそんなに私が息絶え絶えで登校してきたことが嬉しいの？

その満面の笑みと今の私が無くしてしまった優雅さを寄越しなさい。

「ええ、今日は朝から知人が訪ねてきていたので…私も会話を楽しんでいる内に時間を忘れてしましたの。」

何とか取り繕つたぎこちない表情で無理矢理いつものキャラを演出する。

「ぶつははつ、いいつていいつて。そんな肩で息してるような状態で無理な余裕見せられたって、違和感しかないよ。」

ぐう、……なんだかものすごく負けた気分だ。

それもこれも全部アヴェンジャーのせいだ。

強引に令呪で強制送還させようとしたら『そいつは勘弁だ。今令呪を使われるのはまじい。』とか言つてあつせりと聞き入れてしまつた。

その割に戻つてくるのはめちゃくちゃ遅いし。

なにをしていたのかと聞けば『ん? コンビニでおでん喰つてた』しかも私の財布からお金を探していった始末。

ふ・ぞ・け・ん・な!-!

あの不審者全開の姿あんたはコンビニに入ったのか、そして私のお金を使ったのか!-!

アイツの思考回路は、いけないことさせずやつてみようかと考える中学生のチンピラか?

「まったく、間桐兄はいつも通りのサボりかと思えば妹の方はやけに拳動不審。皆勤怠バカの衛宮は欠席、でお次は息絶え絶えの遠坂

なんて、今日はなんかイベントでもあるの？」

「え？」

枯れたとはいっても、聖杯戦争システムの最重要、根幹となる術式氣盤を作り上げた間桐君は巻き込まれないようにするために籠城するは何となく予想していた。

もしも外来のマスターが聖杯戦争に大胆かつ最も容赦のない形で介入してくるとすれば、一番手っ取り早いのが間桐への襲撃だと推測できる。

現在の間桐にいる正統な魔術師は老獴の間桐臓硯只一人。

いくら年齢不詳の何十年という歳月を積み重ねた魔術師だろうと街中でサーヴァントに襲われたらひとたまりもないだろう。

籠城策に出るのはある程度予想していた。

だけど、聞き捨てなら無い一言が確かに聞こえた。

桜が学校に来ている？

どういふことだ？

養子とはいへ間桐を名乗る以上、あの馬鹿（慎一）が強引に当主を名乗つてはいるとしても桜には危険が付きまとつ時期だ。

それをまるで合戦前の平野に放り出すよつたマネをするなんて魔術師の家系でもしない筈。

学校に行く。

それだけで登下校間に危険は付きまとつ。

増して田が落ちるのが早い冬のこの季節、学校が終わるころには辺りも夕闇に包まれると雪つのこと。

衛富士郎、たしかそいつの家にしじつちゅう上がり込んで献身的に押し掛け妻宜しくしていと云う話は聞いたことがある。

ならば今聞いた挙動不審と云う言葉も納得しただらう。

だけど、それは遅れてでもその衛富君が学校に来ていればの話だ。

当の本人が学校に来ていないので、何故間桐桜は学校に行く必要があるのか？

解らない、…が、推測できないわけじゃない。

昼休みになり屋上へ出向を靈体化しているアヴァンジャーに声をかける。

「ああ？なんだよ凛たん？あ、もしかしてその弁当くれんの？ひゅー、ヒューッ！凛たんの弁当を！」の足で踏みつけんことができるとか、マジでこじるね。」

やらんわボケえ！！

しかも食べるんじゃなくて踏みつけんのか。つづづく救えない外道サーヴァントだ。

「ちよひと調べたい」とがあるの。

「くそ、そこいつまた物騒な話題だな。んで、お駄賀は？」

「今朝のおでん代でチャラにしてあげる。」

「ちえり、踏み倒してやるうかね？」

「殺すわよ」

「へいへい、凶暴なマスターは頼りになるなあ。」

まったく、ここにまことにいつまく漫才のよつなやり取りをしなければ会

話が出来ないのか？

「間桐の家の周辺を調べてちょうだい。勿論敷地にまで入る必要はないわ。500メートル圏内に使い魔やその類が居ないかどうかを調べてくるだけでいいから。」

「あん？ 何だよ気になるお年頃の凜たんはまさかこの俺を使ってストーキングか？」

「ボケかますのも状況を読みなさよ。間桐って言つのはアインツベルンと同じ御三家の一角だつた所よ。」

「『だつた』つてこたあ、今は違うのか？」

「間桐は土地の靈質が合わなかつたのか、次世代に魔術師の因子を引き継ぐことが出来なかつたのよ。」

「ふうん。で？ んな没落魔術師の家に何の『アラウガ』が？」

「あの家にはまだ妖怪魔術師ジジイが一人居るのよ。だから聖杯戦争の契約システムとか貴重な魔術資料が残つてゐるわけ。」

「成程、つまり下手に狙われるとこっちが不利になるから監視しておけつてことか。ありや？ でもそんなら俺がぶっ殺しの皆殺しにして家ごと潰しちまえばそんなんめんど癖え真似する必要ないじやん？」

「それはこっちの事情よ、もう聖杯戦争に出ることがない間桐なんて魔術の知識があるだけで一般人と変わりないじゃない。そんな相手をあえて殺す必要なんてないわ。……心のせい肉だけね。」

「ひひひ、何だよ凛たん『勘違いしないでよね』みたいなセリフは吐かないのかよ？」

「ううさいわね！－いいからあんたは私が家に戻つたら監視を始めなさい。」

「…凛たんのニユーヨクシーンを？」

「死ねえつ！－！」

そして人の話を聞け、このエロサーヴァントめ。

そうだ、先輩はロリコンなんかじゃない。

いつも私が起こしに行くと決まってバツが悪そうに股を抑えて、ちらりと私の胸を凝視して目を逸らすんだ。

それって私の胸に興味があるからでしょう？

私の体に興味があるからでしょう?

見た目が小学生の美少女に優しくするのは先輩のいつもの癖。

正義の味方なんだもの。

小さい子を護るのも立派な勤めでしょう?

確かにあの子は見た目の容姿に似合わず胸があつたみたいだけれど、

私の方が断然大きいもの。

バスト85センチのEカップは伊達じやないんだから。

兄さんが言つてたもの、男は巨乳に憧れるつて。

きつと先輩に限つて小さい胸が好みだなんてことはないわ。

でも、今日はあの子のために学校を休んで「一人つきりで一日を過ぐ」すらしい。

そんなの絶対にいや。

私だつてもつと先輩と一緒にいて、一緒に料理を作つて一緒に宿題をやつて一緒にテレビを見て一緒にお風呂とかお布団とか

あの子はまだ小さいし、先輩とそんなことまど平氣で出来るのだろうか？

うん、先輩は優しいし迫られればきつと流されちゃう。

髪が独りじや洗えないとか言つて、一緒にお風呂に入ることも、寂しくて一人じや眠れないとか言つて先輩のお布団の中に入るることも

悔しい。

それが率直な感想だ。

聖杯戦争さえ終われば、私の最後の一手さえ終われば後は何の憂いもなく先輩に告白しに行けるのに。

そうすれば先輩と一緒に暮らすことでもできるのに。

いいや、考えが先走り過ぎてる。

まずは先輩の気持ちを大事にしなきゃいけない。

いきなりの急展開に先輩が心にもなく私を拒絶することだって考えられる。

そうよね。

いくら先輩が優しいからって、それに付け込むようなマネはしたくないもの。

まずは私がどう魅力的に自信を表現するかって言つことが重要だものね。

藤村先生が『就職担当の先生が自分をどうのアピールして魅力的な商品として売り込むかが重要だと話す話を一冊中していく疲れる』って話していたつけ。

そり、今までに間桐でなくなつた桜（私）にはこの状況が当てはまる。

自分をどう魅せるか。

先輩にどう見てもいいつか。

一後輩じゃなくて、女の子として女性として異性として見てもらつて、そこから私と付き合いたい、自分だけの女にしたいって思つてもらわなくちゃいけない。

その為には……

今日の晩御飯はメイちゃんが来たお祝いにどうと御馳走を作つ。

内助の功

勿論、先輩の家計に負担をかけないように工夫に工夫を重ねるもの忘れちゃいけない。

将を射んとするならまず馬から

メイちゃん「私という存在がどれ程先輩に必要なのか、それを認識  
されなくっちゃいけない。」

まさこ一石一鳥

家庭的な女の子らしさで、それでいて密かに先輩の味を越えている  
料理を振舞う」と心をわざわざかみこしあげ。おひめやけじて

「よつよつ、田舎の一じゅーちゃん。聞桐つてヤツの家は何処だか  
しきね~しきね~しきね~しきね~しきね~しきね~しきね~しきね~」

いきなり後ろから聞き慣れた声で、絶対に聽かないセリフを聞いた。

## 嘘14話（後書き）

アヴェさんの本日のお買いもの。

おでん均一70円セール。

大根、卵、はんぺん、つみれ、ガンモ、ちくわ。

|| 420円

ロングTシャツ=340円

ファンデーション×2=1800円

ヘアスプレー=950円

計=3510円

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6555w/>

---

Fate/Aveng

2011年11月23日14時45分発行